

# 大菩薩峠

白根山の巻

中里介山



机竜之助は昨夜、お絹の口から島田虎之助の最期さいごを聞いた時に、

「ああ、惜しいことをした」

という一語を、思わず口の端から洩はらしました。

そうしてその晩、お絹は夜具を被かぶつて寝てしまつたのに、竜之助は柱に凭もたれて夜を明かしたのであります。

その翌朝、山駕籠やまかごに身を揺られて行く机竜之助。庵原いおはらから出て少し左へ廻りかげんに山をわけて行く。駕籠かごわきにはが、んり、きが附添おうて、少し後おくれてお絹の駕籠。

山の秋は既に老いたけれども、谷の紅葉もみぢはまだ見られる。右

へいつぱいに富士の山、頭のところところに雲を被っているだけで、夜来の雨はよく霽はれたから天気にはまず懸念けねんがありません。

お絹は駕籠の中から景色を見る。竜之助は腕を組んで俯向うつむいている。

「百蔵さん」

お絹はが、んり、きのことを百蔵さんと呼ぶ。

「何でございます」

「まだその徳間峠とくまとうげとやらまでは遠いの」

「もう直ぐでございます、この辺から登りになっていきますから、もう少しすると知らず知らず峠の方へ出て参ります」

「なんだか道が後戻りあともとどをするような気がしますねえ」

「峠へ出るまでは少し廻りになりますから、富士の山に押されるようなあんばいになります、その代り峠へ出てしまえば、そ

れからは富士の根へ頭を突込んで行くと同じことで、爪先下りに富士川まで出てしまふんでございますから楽なもので」と言いながら、竜之助の駕籠わきにいたが、んりきが、お絹の駕籠近くへやつて来て、

「それでもまあ、天気がこの通り霽れましたからよろしゅうございます」

「天気はよいけれども、お前さんのために飛んでもないところへつれ込まれてしまいました」

「へへ御冗談でしょう、あなた様の御酔興で、こんな深山の奥へおいでなされるのですから」

「でも、お前さんが、山道は景色が好いの、身延へ御参詣をなさいのと、口前をよく勧めるものだから」

「はは、その口前の好いのはどちらでございますか、この道は

険けわしいから、あなた様だけは本道をお帰りなさいと先生もあれほどおっしゃるのに、山道は大好きだとか、身延山へぜひ御参詣をしたいとかおっしゃって、わざわざこんなところへおいでなさる。いや、これでなけりやあ、竹の柱に茅かやの屋根という意気にはなれませんな」

「そんなつもりでもないけれど、わたしも実は本道が怖こわいからね。七兵衛のような気味の悪い男に跟つけられたり、人を見ては敵呼かたきよばわりをするような若い人に捉とまったりしては災難だから、それでわざわざ廻り道をする気になりました」

「いや、どっちへ廻つても怖いものはおりますぜ、この道を通つて身延へ出るまでには、きつと何か別に怖い物が出て参りますよ」

「おどかしちゃあいけませんね、何が怖いものだろう」

「ははは、別に怖いものもおりませんが、山猿が少しはいるようでございます、それから、どうかすると熊が出て参ります」

「怖いねえ」

「先生が附いているから大丈夫でございますよ」

竜之助は前の駕籠で、二人の話を耳に入れている。が、んりき、もなれなれしいが、お絹もなれなれしい。二人ともになれなれしい口の利き様きようであります。

お絹という女、誰にでもなれなれしい口の利き方をする。旗本のお部屋様として納まっていられない女。気象きしょうによつては、こんな男と言葉を交すのでさえも見識けんしきにさわるように思うのであるに、この女は、それと冗談じょうだんぐち口をさえ利き合つて平気でいます。

が、んりき、が昨夜の言い分、お絹はそれを知らないから、平気

で話をしているが、たとえ冗談にもせよ、そういうことを聞いている竜之助にとつては、二人のなれなれしい話し声を不愉快の心なしに聞いているわけにはゆくまいと思われれます。

「ここが峠の頂上でございます」

ようように山駕籠が徳間峠の上へ着きました。

「さあ若い衆さん、休んでくれ」

徳間峠の上で二つの駕籠が休む。が、ん、り、き、は腰に下げていた一瓢びょうを取り出して、

「先生、お一つ、いかがでございます」

駕籠の中の竜之助に持って行って、次に、

「若い衆さん、お前も一つどうだね」

「へえ有難うございます」

この駕籠舁かごかきは海道筋かいどうすじの雲助と違つて、質朴しつぱくなこの辺の百姓。

「御新造様ごしんさま、一ついかがでございます」

「駕籠を出ていただきましよう」

が、んりきが、また猪口ちよくを出す手先をお絹みとがは見咎めて、

「百蔵さん、お前の手はそりや……」

「ええ？」

が、んりきは驚いて手を引込ませ、

「ナニ、いたずらでございます」

と言つて、左右の駕籠舁の方に氣を兼ねるらしい心持。けれど  
も質朴な駕籠舁は、この時に眼を見合せました。

「こりや甲州無宿いれずみものの入墨者だ、この入墨者を峠から一足でも甲  
州分へ入れた日にゃあ、こつちの首が危ねえ」

こう言つて駕籠舁どもが、一度に立ち上つて噪さわぎ出しました。

「抜いた抜いた！」

噪ぎ出した駕籠舁が急に仰天して逃げ出します。見れば駕籠から出た机竜之助が刀を抜いて立っていました。

「先生、何をなさいます」

竜之助は物を言わず、逃げて行く駕籠屋は追おうともせず、が、ん、り、き、の、声、の、す、る、方、へ、向、つ、て、来、ま、す、か、ら、

「あ、危のうございます」

が、ん、り、き、も、驚、く、お、絹、も、驚、く。驚いて逃げるが、ん、り、き、の、方、へ、寄、つ、て、行、く、竜、之、助、ふ、ら、ふ、ら、と、し、て、足、許、が、定、ま、り、ま、せ、ん。

が、ん、り、き、は、竜、之、助、の、刀、を、避、け、て、榎、の、木、の、蔭、へ、隠、れ、る。白、刃、を、閃、め、か、し、た、竜、之、助、は、蹠、踉、と、し、て、が、ん、り、き、の、隠、れ、た、榎、の、木、の、方、へ、と、歩、み、寄、る。

「先生、御冗談じゃありません、わっしをどうしようと言うん

でございます」

が、ん、り、き、は、木、の、蔭、か、ら、叫、ぶ。その声をたよりに刀を振りかぶつた竜之助。

「先生、眼が見えるんでございますか、わっしをお斬りなさるんですか」

が、ん、り、き、は、刀を振りかぶつた竜之助の形相ぎようそうを見てまた驚く。静かに歩み寄る足取りが盲目の人とは思われない。閉じた眼が、が、ん、り、き、の、面かおに向いて輝くような心持がしますから、

「あ、危ねえ」

が、ん、り、き、は、櫛くしの木の蔭に居堪いたたまらないで、身軽に飛んで、高さ一丈余りある国境くにぎのかいの道標の後ろへ避ける。

「これ是より甲斐国巨摩郡……」

是より駿河国庵原郡……」

が、ん、り、き、の飛んだ方へ竜之助が向き直る、そうして徐々そろそろと歩み寄る。

「あ、冗談じゃねえ、先生、眼が見えるんだね」

が、ん、り、き、は、この時、本当にまだ竜之助の眼が見えると思つたくらいですから、この道標の蔭からいずれへ逃げてよいかわからぬ。甲斐国巨摩郡と書いた方へ出れば右を斬られる、駿河国庵原郡と書いた方へ出れば左を斬られる、こうしていれば道標もろとも前から梨子なし割りわ。後ろを見せれば背を割られる。進退窮きわまつて道標の蔭から竜之助の隙すきをうかがう。

そこへ歩み寄つて来た竜之助。が、ん、り、き、はたまらなくなつて、「おい、御新造ごしんさま様、先生は気が違つたぜ、なんの咎とがもねえわつしをお斬りなさろうと言うんだ、あ……危ねえ」

この時、水を割るようにスーッと打ち下ろした竜之助の刀。

絶体絶命で脇差へ手をかけながら左へ飛び抜けたが、がんりきの右の手を、二の腕の半ばからスポリ、血が道標へ颯と紅葉もみじ。

「あ痛えッ」

がんりきは、斬り落された切口を左の手で着物の上から押えて横つ飛び。

「きちがい狂人に刃物とはこれだ、手が利いているだけに危なくつて寄りつけねえ、御新造様、早く逃げましょう、ぐずぐずしているとお前様も殺やられちまいますぜ」

尋常ならば眼を廻すべきところ、腕一本落して命を拾い出そうとするが、がんりきは、

「早くお逃げなさいと言うに」

「どうしたんでしよう、まあ」

お絹は、さすがに狼狽ろうばいして途方に暮れているのを、

「どうもこうもありやしねえ、早くわつしの逃げる方へお逃げなさい」

が、んりきは峠道を飛び下りる。お絹はそれと同じ方へ飛び下りる。駕籠屋は、ただ白刃の光を見ただけで疾うに逃げてしまいました。駕籠屋の逃げたのは駿河の国、が、んりきお絹の逃げたのは甲斐の領分、双方ともに後をも見ずして逃げ去ったあとに、ひとり残る竜之助。

刀の血振ちぢふるいをして道標の柱へ手をかけてほつと一息。

やがて持っていた刀をそこへ投げ出すとひと齊しく、道標の下へ崩折くずおれるように倒れて、横になつて落葉の上へ寝てしまいました。

昨夜の雨がまだ降り足りないで、富士の頭へ残して行つた一

片の雨雲がようやく拡がって来ると、白根山脈の方からも、それと呼びかわすように雨雲が出て来る。それで、天氣が曇つてくると富士嵐ふじおろしが音を立てて、梢こずえの枯葉を一時に鳴らすのでありました。

竜之助は道標の下に倒れて、昏々こんこんとして眠っている間に、サーツと雨が降つて来ました。時雨しぐれの空ですから、雲が廻ると雨の落ちるのも早い。

ちょうど雑木ぞうきの蔭になつたところで、いくらか雨は避けられるようになつてゐるが、葉末から落ちる時雨しずくの雫がポタリポタリと面かおを打つので竜之助が、うつらうつらと気がついたのは、あれから、やや暫らくの後のことでした。

「雨が降っているようだな」

まだ本当に正気には返らないで、昏倒こんとうから醒めさかかった瞬間

の心持は、連々れんれんとして蜜のように甘い。時雨の雫がポタリポタリと面を打つことが、かえって夢うつつの間を心持よくして、いったん醒めかかつてまた昏昏として眠くなるうちに、

「ああ、水が飲みたい」

で、また我に返りました。

せつかく、よい心持で、いつまでも眠りに落ちようとするのに咽喉のどはしきりに水を飲みたがって、

「水、水、水」

讒言うわごとのように言いつづけたが、誰も水を持って来てくれそう  
な者はなく、水を欲しがる竜之助の面へは雨の雫がポタリポタリと落ちて来るばかりです。

こういう時の夢には、滾々こんこんとしてふき出している泉や、釣瓶つるべ  
から釣られたばかりの玉のような水、草叢くさむらの間を潺々せんせんと流れる

清水などが断えず眼の前に出て来るもので、

「あ、有難い、水」

と言つて竜之助は、それを手に掬むすんで口へ持つて来ようとする  
と、煙のようになくなつてしまします。

竜之助は、これもかなり長い時の間、夢うつつの境に水を求め  
て昏倒していましたが、村方の方からは駕籠だけでも取り戻しに  
来そうなものだが、それも来る様子はなし、腕を斬られて逃げ  
たが、んりきと、それと一緒に逃げたお絹の方からも何の音沙汰おときた  
もなし。

「まだ雨が降っているようじゃ」

もうかれこれ日は暮れる。その時分ようやく正気がつきかけ  
ると、さて自分はいま峠の上に寝ているな、うむ、あのがんり  
き、という奴を斬つた、駕籠屋が逃げた、そもそもここは甲斐と

駿河の境だと彼等の話に聞いていた、その前にかの古寺、その前は……それにしても水が飲みたい——

「水、水」

咽喉は乾いてゆくけれど、昏睡こんすいの慾が強くて、ややもすれば深き眠りに落ちようとする。

ここは甲州入りの拔道ぬけみち、滅多めったに人の通るところでないことが、寝ている竜之助のためには幸か不幸か。このまま深い眠りに落ちてしまつては……よし眼が覚めたところでこの人には、どちらへどう行つてよいか方向がわかるまいけれど……

二

甲斐の白根山脈と富士川との間の山間一帯に「山の娘」とい

う、名を成さない一団体の女子連おなごれんがあります。

仕事の暇な時分に、山の娘は他国へ行商に出かける。

山の娘は、揃めくらいの盲縞らしまの着物、飛白かすりの前掛まえかけ、紺こんの脚絆きやはん手甲てつこう、菅すげの笠かさという一様な扮装いでたちで、ただ前掛の紐とか、襦袢じゆばんの襟えりというところに、めいめいの好み、いささかの女性らしい色どりを見せているばかりであります。娘といつても、なかにはかなりのお婆さんもあるけれど、概して鬼も十八という年頃に他国へ出入りして、曾かつて山の娘の間から一人の悪い風聞ふうぶんを伝えたものがないということが、山の娘の一つの誇りでありました。

なんとなれば、これらの娘たちが、もし旅先で、やくざ男の甘言かんげんに迷まよわされて、身を過あやまつようなことがあれば、生涯浮うぶ瀬せのない厳きびしい制裁を受けることになつてもいるし、娘たち自身も、その制裁を怖おそるるよりは、そんな淫みだらなことに身を過あやまつのを

慙<sup>は</sup>ずる心の方が強かつたからであります。

それと共に、一隊の間には、たとえ離れていても糸を引いておくような連絡が取れていて、一人が危難に遭うべき場合には、たちどころに十人二十人の一隊が集まり得るようになしてあるから、たとえいかなる悪漢でも、その中の一人を犯すことはできないのでした。故に山の娘は、知らぬ他国へも平気で出入りして怖るることがないのであります。それとまた、山の娘の一徳は秘密を厳守する力の優れたことで、彼等の間において約束された秘密は、それは大丈夫が金石の一言と同じほどの信用が置けるのであります。女は秘密の保てないものという定説が、山の娘だけには適用しない、彼等はその仲間うちの秘密を他に洩らすことのないように、得意先の秘密と人の秘密をも洩らすよいうなことは決してないのです。大塩平八郎の余党の中には甲州

へ落ちたものが少なからずある、その中の幾人かは、この山の娘たちによって隠され保護されて一身を全うしたという説は、あながち嘘ではないようです。

ちようど降りかかった時雨しぐれを合羽かっぱで受けて、背に負うたそれぞれの荷物を保護しながら、十余人のこの山の娘が、駿河路すまがじから徳間峠とくまとうげへかかって来たのは同じ日の夕方でありました。

「さあ、峠の上へ着きましたぞい」

「福士ふくしまで行つて泊らずかい」

組の頭かしらは、さきに竜之助、お絹の一行が乗り捨てた山駕籠のところまで来て、

「まあ、ここに駕籠が二つも乗り捨ててあるが、どうしたものであろうなあ」

「物扱いの悪い人たちじや」

その駕籠の周囲へ山の娘の一隊が集まる。

「身みの延ぶさ様参りは、折々この道を通る人がありますから、それが……  
はて、煙草入が落ちていたり、駕籠の中には蒲ふとん団や包みがある、  
ままであつてみたり……」

彼等はようやく異様な眼で、そこらあたりを見廻し、  
「おお、怖い、落葉の中に光る物が……」

最も早く見つけたのは、組の中でもいちばん若い人。

「あれあれ、血かたまりの塊かたまりが……」

山の娘の一人が絶叫する。

「血の塊と言わんすか」

駈けて行つて見ると、

「おう、気味の悪い、人の片腕、こりや人間の片腕ではござい  
ませぬかいなあ」

落葉の上の片腕、血は雨に打たれてドロドロにとけて流れている。

「ああ、ここには人が一人殺されて倒れていますわいなあ」

「ナニ、人が殺されて？」

山の娘は、今度は走り出さないで、十余人が一度にかたまつてしまう。針鼠はりねずみは危険に遭うた時は、敵へ向つては反抗しないで、かえつてわが身を縮める。山の娘たちもまた、危難の暗示ある時は、遠のいていたものが必ず密集する、そうして組の頭かしらの取締りの者がまず口を開くまでは、なんとも言わないのが例となつていたのでした。

「皆さん」

真中に立った頭の女は三十ぐらいの年頃で、血色がよくて分別のありそうな人。

「はい」

一同は神妙に返事をする。

「身延参りをなさんす旅の人が、今これで追剥おいはぎにあいなさつたようじゃ。これから先の道が危ない。皆さんたち甲州入りをなさる気か、それとも駿河の方へ帰りますか」

「それは姉さん次第」

「それなら皆さん、駿河へ帰るも甲州へ入るも人家までは同じぐらいの道程みちのり、いつそ甲州へ入ることに致しましょう」

「承知しました」

「わたしが先へ立って参ります、お浪さん後からおいでなさい、いちばん若い人を真中にして」

「心得ました」

「わたしが音頭おんどを取りますから、人家へ出るまで皆さん、歌を

うたつて下さいまし」

「よろしゅうございます」

「それで、人家へ着いたなら、お役人の方へ御沙汰ごさたをしなくてはならぬから、一通り、あの人の殺されているところを調べて参りましょう。さあ一緒になつて」

一団になつた山の娘は肅々しゆくしゆくとして道標かたわらの傍へやつて来る。

「長い刀……」

頭のお徳は竜之助が捨てた刀を落葉の中から拾い取る。

「この片腕……」

血が雨で洗われている片腕——さすがに気味を悪がつて面かおを反そむける。

「この人は、こりやお武家じゃわいな」

恐る恐る竜之助の傍へ寄る。

「水、水が飲みたい」

「え、えッ！」

山の娘たちは一足立ち退く。

「生きていますぞいな、このお人は」

「なんぞ物を言いましたぞいな」

年嵩としかさのお徳とお浪とは、竜之助の傍へ再び寄つて来て、

「もし」

「うーむ」

「もし」

背を叩たたいて呼んでみて、

「このお人は生きてござんす、その片腕を切られたのは、このお人ではござんせぬ、薬を飲まして呼び生いけて上げましょう」  
薬はお手の物。

「水があるとな」

「どこぞ捜さがして来ましようか」

若いのが一人出ようとするから、

「いいえ、離れてはなりません、一足なりと一人でここを出てはいけません。皆さん、笑いなさんな、このお人に、わたしが口うつしでこの薬を飲まして上げるから」

山の娘の頭かしらのお徳は、気付きの薬を自分の口へ入れて嘔かむ。

竜之助を抱いてお徳は、口うつしに薬を飲ませる。

男に許すことを知らない山の娘も、人を助ける時には大胆な挙動をする。よし、これが竜之助でなくして、道に倒れた悪病の乞食であったにしても、その一命を取り返す必要があれば、山の娘は必ずこういうことをするのです。

無論、一行の中には、それを怪しむものもなければ笑うもの

のありようはずがない。

「はーっ」

と気が開けたひら竜之助。

「お気がつきましたかいなあ」

「有難い」

「お気を確かにお持ちなさいませ」

「もう大丈夫」

竜之助は身を起して、道標の傍に立とうとしたけれど足がふらふら。

「お危のうござんす」

山の娘たちが押える。

「このお刀はあなた様の……」

「ああ、そう。いや、どうも有難い」

「拭いて上げましょう」

山の娘は手拭てぬぐいで刀を拭いて竜之助に渡す。

「ここに人の片腕が斬り落されてござんすが、こりやどうしたわけでござんすかいな」

「ああ、それは……」

竜之助は刀を鞘さやに納めながら、

「悪い奴が出たから斬つたのじゃ」

「悪い奴、その悪い奴は、片腕だけを残してどつちへ参りましたかいな」

「いずれへ逃げたか知らぬ、斬ると逃げた、そのままわしは眠くなつてここへ倒れて寝た故に、前後のことは更にわからぬ」

「悪い奴でござんすなあ。皆さん、その手をここへ持つて来て、お武家様にお目にかけるがよいぞや、お見覚えがありなさんす

かも知れぬ」

「それもそうでござんすな」

お浪が拾つて来た、が、んり、きの片腕。

「どうぞこの悪い奴の片腕を、篤とくとごらん下されましな」

「はは、わしは眼が見えぬのじゃ、この通り不自由者じゃ」

「お目がお不自由……まあ、そうでござんしたか、それは失礼なことを」

山の娘たちは、今更のように竜之助の面を見る。

「ああ、皆さん、この片腕はなあ」

腕を持って来たお浪が、何か気がついたように叫ぶ。

「その片腕が、どうなさんした」

「この片腕には入墨がしてありますぞいな。この入墨は甲州入墨といつて、甲州者で悪いことをしたのが、甲府の牢屋ろうやへつな

がれて追い出される時に、この入墨をされるのじゃわいな」

「まあ、どこにそんな入墨が」

「これ、この通り、手首から五寸ほどのところに二筋の入墨」

なるほど、斬り落された腕にはその通りの入墨がある。

「案あんの定じょう、悪い奴。悪い奴なればこそ、こうして腕を切られても逃げおお了おせたと見えますなあ」

「それはそうとあなた様、お不自由なお身で、おつれもござんせぬにここへおいでなさいましたかいな」

「つれはあつたけれど、やはりその騒ぎで逃げてしまった」

「そうして、ここはお関所のない山路、どうしてこんなところへ」

「これから行けば身延へ出られるとやら。身延へ参詣して甲州街道へ案内すると言うてつれて来られたが」

「左様でござんすかいな、なんにしてもこの雨の降るところでは……皆さん、どうして上げましようぞいな、このお方様」

「幸い、乗り捨てなさんしたあのお駕籠、あれへお乗りなすつたら、わたしたちが交かわる交かつる昇かいでお上げ申して、ともかくも人家のあるところまで……」

三

東海道筋から甲州入りの順路は、岩淵いわぶちから富士川に沿うて上

ることでもあります。甲州へ入ると、富士川をさしはさんで二つの関があります。向って右の方なのが十島とおしま、左が万沢まんざわで、多くは万沢の方の関を通ります。宇津木兵馬もまた同じく万沢の関へ通りかかりました。兵馬は要路の人から証明を貰っているか

ら、いつ、どこの路をも滞りなく通過することができるので、七兵衛は兵馬と一緒に歩く時のみはその従者として通行するが、一人で歩く時は、到るところのお関所を超越してしまいます。

「あいつはたしかに甲州者なんでございます」

兵馬に向つて七兵衛が言う。

「どうしてそれがわかります」

「言葉にも少し甲州訛りがありますのと、それからあいつの手に入墨があるのでございます、そいつが甲州入墨と、ちゃんと睨んでおきましたよ」

「甲州入墨というのは？」

「手首と臂の間に二筋、あれこそ甲府の牢を追放しにされる時に、やられたものに違いございません」

「甲府を追放されたものが甲州へ入るとは、ちと受取りがたい」

「なに、あいつらはそんなことに怖おどつかする人間ではございませぬ。なんでもこの辺の間道ぬけみちを通つて、甲州入りをしたものに違ちがいございませぬが、あいつが盲目めくらと足弱をつれて、どういう道行みちゆきをするかが見物みものでございませぬ。これから川岸を西行さいぎやう越え、増野ますの、切久保きりくぼ、福士ふくしと行くうちに、何かひつかかりが出て来るから見ていてごらんなさい、無事に身延まで伸のせたら、この七兵衛かぶとが兜かぶとを脱いでしまいます」

「しかし、間道から身延へ出ないで、信濃路まぎへ紛れ込まむようなことはなからうか」

「どうしてどうして。あれごらんなさい、あの白根山しらねざんの山つづき、鳥獸とりけものでさえも通かよえるものではございませぬ。どのみち、水が低いところへ落ちて来るように、あの道を出たものは、いやでもこの富士川岸へ落ちて来るのが順なのでございませぬよ」

「もしまた、さきはこの川へ出て、船で逆に東海道へ戻つてしまふようなことはなからうか」

「それは何とも言えません……なにしろこの川は、かじかざわ 鯉沢から岩淵まで十八里の間、下る時は半日で下りますが、これを上へ引き戻すには四日からかかりますからな。しかし、やつぱり舟にも関所がありましたね、ふなあらた 舟改めをされますから、舟で逆戻りをするようなことになるかと、かえつて毛を吹いてきず 疵を求めるといふようなことになりましょう、それは大丈夫でございませう」

「舟改めはどこでやります」

「やはりこの万沢と十島とでやるのでございませう。それにひつかかつて御覧ごらんじろ、入墨者と女と、それからお尋ね者のような、あの竜之助様、忽ちに動きが取れなくなつてしまふのでございませうから、大丈夫、舟へかかるきづ 気遣いはございませう」

「七兵衛どの、そなたの言うように、あの三人が果して一緒におるものやら、それとも離れ離れになっているものやら、それもようわからぬではないか」

「三人は三つ巴みじもえのようになって、ちよつとは離れられない組合せになっているのがおかしゅうございます。それとも離れる時には、どれか一つ命が危ない時で、まかり間違えば三つ共倒れになるのが落ちでございますから、そーつと置くのがかえって面白いんでございますがね」

こんな話をしながら兵馬と七兵衛は、富士川岸の険路を、前に言ったように西行越えさいぎょうこ、増野ますの、切久保きりくぼと過ぎて、富士川ふくしがわのほとりへ来た時分には日が暮れかかっています。

「昨日の雨で、少し水が出たようでございますが、ナー二、このくらいなら大したことはございません、川留めになるような

ことはございません」

水のひたひたと浸ついた板橋を渡りながら、

「この川は富士川の支流わかれか知らん」

「富士川の支流ではござんすまい、駿河境の方から出て富士川へ流れ込むのでございましょう。これだけの流れでございませうが、雨上りにはかえつてこんなのが厄介で……」

と言いきまして、板橋を半ばまで渡り来きたった七兵衛、そこで立ち止つて、流れの少し上手かみての方をじつと見る。

「宇津木様、少しお待ちなすつて下さいまし」

七兵衛は、先へ行く兵馬を呼び止めて、自分はやっぱり川の少し上手の方を見えています。

「どうしました」

「どうも何だか、あすこに変なものが、あの石と石との間に挟

まつておりますな」

「おお、何か白いものが……」

夕暮れのことであり、少し離れているところでしたから確しかとは見定め難いけれど、

「どうやら、人間の腕のように見えますが、あなた様のお眼では……」

「左様、わしが眼にもどうやら……」

「向うへ廻つてよく調べてみましょう」

一旦、板橋を渡りきつて七兵衛は、岩の間を飛び越えてそこへ行つて見る。

「宇津木様、この辺でございましたな」

「そこへ真直ぐに手を伸ばせば……」

「それではこの棒で突き出してみますから、そちらで受けて下

「さいまし」

岩の間に淀<sup>よど</sup>みもせず流れもせず、ふわりとしていたものを七兵衛が上から棒で突き流すと、兵馬の足許へ流れて寄つたのは、「おお、たしかに人の片腕」

「なるほど、人の片腕に違いございませんな」

七兵衛はその片腕を棒の先で砂洲<sup>さす</sup>の上へ搔<sup>か</sup>き上げて、腕を見すると、意味ありげな笑い方。

「こんなことだろうと思つた」

兵馬にはその意味がよく呑込めないでいると、

「宇津木様、凶星<sup>ずぼし</sup>でございますよ」

「凶星とは？」

「この通り、御覧下さい、この腕に二筋の入墨がございます、これがさいぜんお話し申し上げた、甲州入墨でございます」

「なるほど」

「どうか、スパリとこの腕をやった切口をよく御覧なすつて下さいまし、斬手がどのぐらいの奴だか、それをよく御覧なすつて下さいまし」

「ははあ」

兵馬は篤とくとその切口を見る、手は右の二の腕から一刀に。

「よく切つてある」

「さあ、斬つた奴は生きてるか、斬られた奴は死んでしまったか、これからがその詮議せんぎでございますよ。どのみち、この川上の仕事に相違ちがひございません」

「尤もつともだ」

「今晚はこの富士へ泊つて、土地の人によく地の理を聞いてみましょう。地の理を聞いてから、この川上へ行つて見ると、思

いにつけぬ獲物えものがあるかも知れませんよ。なんでもこの川沿いに、駿河へ出る路が別にあるに相違ありませんですね。そうなれば、もうこつちのものでございますよ」

七兵衛はなお川上を見る。兵馬はその腕をよく見ている。

「この腕がここへ流れつくまでには、かなりの時がたったであろう……斬つて逃げたか、斬られて逃げたか」

「眼があんなでなけりやあ、腕だけで逃す斬手ではございませんがね。またこつちの奴にしたところで、片一方斬られて、それなりで往生する奴でもございません。ところであのお絹という女、あの女がどつちへついて逃げたか、それは考え物ですね。この腕はこうして置くもかわいそうだから、砂の中へ埋めておいてやりましょう。まあ、あの野郎も、この腕一本のおかげで命拾いをしたと思えば間違いはござんすまい、この腕はあの野

郎にとつては命の親でございますから、そのつもりでお葬とむらいを  
してやりましょう」

七兵衛は棒の先で砂場へ穴を掘つて、足の先で腕を蹴け込んで、  
砂をかぶせて、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏をいう。

四

福士の宿屋へ泊つた七兵衛と兵馬。

七兵衛は行燈あんどんの下で麻を扱しごいて、それを足の指の間へ挿はさんで  
小器用に細引ほそびきを拵こしらえながら、

「ねえ、宇津木様、知らぬ山道を歩くには、この細引ちようぼうというやつ  
がいちばん重宝ちようぼうなものですよ、こいつを持って歩いてると、ま  
さかの時にこれが命の綱となるのでございます」

兵馬は旅日記を書いていましたが、

「なかなか、器用に撚よれますな」

「へえ、子供の時から慣れておりますからな。子供の時分に、こうしてたこいと尻糸たこいとを拵たこいとえたものでございますよ」

七兵衛は見ているまに二間三間とな縋なつてゆく。

「長い道中をする者は、これと火打道具だけは忘れてはなりません。あなた様なんぞは煙草をお喫のみなさりはしますまいが、それでも火打道具だけはお忘れなすつてはいけませんでござい  
ます」

「それは忘れはしない」

「私共のように煙草を喫みますと、火打道具は忘れろと言って  
も忘れることじゃござんせん。おやおや、そんなことを言つて  
る間に、煙草が喫みたくなつて参りました」

七兵衛は細引をやめて煙草入れを取り、日記を書いている兵馬の方をちよいと覗のぞき込みながら、

「大分、御精が出ますね」

「日記は、忙せわしくともその日に書いておかねば、あとを怠る故」「感心なことでございます。私共なんぞも若い時に、もう少し勉強をしておけば、もう少しよい人になったものでございましょうが、貧乏や何やかで、つい学問の方に精を出すことができませんで、今となつては後悔こうかい先に立たずでございます、若いうちに御勉強をなさらなくてはなりません」

七兵衛は述懐じゆつかいめいたことを言う。

「おやおや、絵図をお書きになりましたね。なるほど、甲州入りの絵図でございますね。よくこんなに細かにお書きなすつたものでございますね。私なんぞはこの甲州を通ることが幾度あ

るか知れませんが、まだ絵図面を取つてみようというような考  
えを起したこともございませんのに、さすがにあなた様は」

七兵衛は兵馬が書いた甲州図を見て、

「なるほど、こちらの方がにしかわうちりよう西川内領、ここがまんざわ万沢でございます

な。こちらが東川内領でとおしま十島。なるほど、この富士川を上つて

ここが福士、それからみのぶかじかざわ身延鰍沢、信州境からぐんない郡内、萩原入から

ちぢぢぢ秩父の方まで、よく出ておりますな。中へ入れば、これでずい

ぶん広いところもありますけれど、こうして見れば本当に甲州

は山ばかりでございますな」

「いや、これはほんの見取図で、まだこれへ書き入れないほか  
の山や川や村がいくらかもあるでしょう」

「そう言われるとそうでございますね。信州さく佐久の方へ出ると  
ころに、まだこのほかに一筋の路がごございますよ。相州口にも、

まだちよつとした間道ぬけみちがございませぬがな、それは処の案内者でないとはわかりませんでございませぬよ。なるほど、この富士から富士川を上つて徳間へかかつて、駿河国庵原郡するがのくにいおはらじへ出る道は記してございませぬ。明日はこの道をひとつ、行つてみようといふんでございませぬ」

「七兵衛どの」

兵馬はようやく筆を休めて、

「さてどうも長の旅路を、いろいろとお世話にあずかつてかたじけなく、なんともお礼の申し様ようもござらぬが、そなたの仕事の障さわりにはなりませんか。こうしてお世話になることは、拙者にとつてはこの上もない有難いことなれど、農事やその他の妨げになるようなことはないか、それがいつも心配で……」

「またしてもその御心配、それはお止めになされませ、そうい

うことにかけては私共は、これで気楽な身分でございます」

兵馬は七兵衛の素姓すじょうをよく知らないのです。ただ自分の娘にしているお松のために尽す行きがかりで、自分に尽してくれるのだと、こう思っています。

一緒に旅をしていますが、不意に姿を見せなくなることがある。そうかと思うと不意にどこからともなく飛んで帰る。

「うちの方は屋敷も田畑も都合よく人に任せて来ましたから、これから当分、伊勢廻りかみがたけんぶつ上方見物をするつもりで、あなた様のお伴ともをして相当のお力になるつもりでございます」  
と言つて、上方からついたり離れたりしているのであつた。気が利いていて足が迅はやい、兵馬にとってはこの上もない力であります。

「宇津木様、私共はあなた様のお力になるといふよりは、こう

して旅を巡めぐつて歩くのが何より楽しみなのでございますから、  
どうか打捨うちちやつてお置きなすつて下さいまし。それからもう一つ  
は、あのお松の爺父おじいさんというのを切つた奴、それを探してや  
りたいんで。こうなつてみると、おたがいに意地でございます  
から、首尾よくあなた様が御本望ごほんもうをお遂げなさるまではお伴ともし  
ていたいでございます」

「いつもながらそれは有難いお心、本望遂げた上で、また改め  
てお礼のできる折もありましよう」

「いや、その時分には、私共はまたどこへ旅立ちしているかわ  
かったものではございませんから、御本望をお遂げあそばした  
とて、お礼などは決して望んではおりません。その代りに宇津  
木様、あなた様のお口から七兵衛という言葉を、一口もお出し  
下さらぬようお願い申しておきたいんでございます」

「そりや妙なお頼みだが」

「ちと變つておりますけれど、あなた様が御本望をお遂げあそばします間の七兵衛と、あなた様が御本望をお遂げあそばした後の七兵衛と、七兵衛に變りはございませんけれど、七兵衛の名前に大した變りがございますから、どうか七兵衛、七兵衛とおっしゃらないように」

「ははは、いよいよおかしいことを言われる」

兵馬は何の合点もなく、ただ笑うばかり。

「ははは、おかしいようなことでございますが、なかなかおかしいことではないんで、うっかり七兵衛とおっしゃると罰ばちが当りますよ」

「罰が当る？」

「そうでございます、御承知の通り私共は韋駄いだてん天の生れかわり

でございまして、下手へたに信心をするとかえつて罰が当ります」  
こんな話をしてその晩はここに泊り、兵馬と七兵衛はその翌朝、暗いうちに福士川の岸を上ります。

岸がようやくやく高くなつて川が細くなる。細くなつて深くなる。峰が一つ開けると忽然とつねんとして砦とりでのような山が行手を断ち切るように眼の前に現われる。七兵衛は平らな岩の上に立つて谷底を見ていたが、

「この水は、あの山を右と左から廻めぐつてここで落合おちあいになるようだが、徳間はあの山の後ろあたりになるだろう、ここらあたりから向うへ飛び越えて行けば妙だが」

山の裾すそから谷底、向うの岸をしばらく眺めているうちに、  
「はて、この谷の中に何かいるようだ」

七兵衛は蔽おほいかぶさった木の中から谷底を覗のぞく。なるほど、

ガサガサと物の動くような音がします。

「宇津木様、この下に何かいますぜ、熊か猪か、それとも鹿か人間か、ひとつ探りを入れてみましょう」

手頃の石を拾って谷底へ投げ落とすと、

「危ない、誰だい石を投げるのは」

谷底から子供の声。

「おや、子供の声のようだ」

七兵衛は深く覗き込んで、

「誰かいたのかい」

「人間が一人いるんだよ」

「人間が……そんなところで何をしているんだい」

「何をしたっていいじゃないか、お前こそ上で何をしているんだい」

「俺は旅人だが、下で音がするようだから石を抛ほうつてみた。そこにいるのはお前一人か」

「私一人だよ、もう石を抛つてはいけないよ」

「もう抛りはしない、その代り道を教えてくれないか」

「お待ち、今そこへ登つて行くから」

「いいよ、お前が登つて来なくても、こつちから下りて行く」

「危ないよ、上手に下りないと岩の上へ落ちて身体が粉になるよ」

「大丈夫——宇津木様、こんな谷底で子供が一人で何をしているのだか、ひとつ下りて行つてみましよう」

七兵衛は兵馬を残して、木の根と岩角いわかどを分ける。

「小僧さん、どこだい」

「ここだよ」

びょうぶ  
屏風のようにになった岩の蔭。水を飛び越えて七兵衛は声の

する方へ行つて見ると、笠をかぶつて首から肩へ袋をかけて、  
尻切半纏しりぎりばんてんを着た十五六の少年が一人、水の中を歩いていきます。

「山魚やまめでも捕るのかい」

「そうじゃないよ、もつと大きな物を捕るんだ」

「山魚より大きなもの——それでは鰻うなぎか鱒ますでもいるのかい」

「そんな物じゃあない、もつと大きな物よ」

「鰻や鱒より大きなもの——はてな、こんなところにそんな大  
きな魚がいるのかね」

「いるから捕りに来るんじゃないか」

「なるほど、鰻や鱒よりも大きい……まさか鮪まぐろや鯨くじらがいるわけ  
でもあるまいな」

「ははあだ、鮪や鯨よりもつと大きな物がいるんですからね、お

気の毒さま」

人を食つた言い分で七兵衛もいささか毒氣どつきを抜かれます。

「鮪や鯨より、もつと大きなもの——それをお前はそれのお椀わんで掬すくつて、その袋へ入れようと言うんだね」

「そうだよ、その通り」

ああ言えばこう言う、少しも怯ひるまぬ少年。

なるほど、少年は手に一箇すいものの吸物椀わんを持っていて、それで水の中を掻き廻していたのです。右のお椀で水の中を掻き廻して掬すくい上げると、鮪も鯨も入つてはいない、ただ川の中の砂がいっぱい。

「どうだ、おじさん、わかつたかい、これは鮪や鯨より大きいものだろう」

「何だい」

「このピカピカ光る物をござらん」

「はてな」

「このお椀を左右へこんなにかたむかすと、それ、だらだらと砂が溢れる。砂が溢れると、あとに残るのがこのピカピカする物。おじさん、これを何だと思う」

「なるほど」

「知らなけりや教えてやろう、こりや黄金きんというものだよ。黄金というものは、この世でいちばん大したものなんだ、鮪や鯨より、もつと大きなものなんだ」

「なあーるほど」

「国主大名のような豪えらい人でもこの黄金の前には眼が眩くらむんだよ、花のような美しい別嬪べっぴんさんでも黄金を見れば降参するんだよ。どんな者でも、この黄金の前へ出れば顔色が変わるんだから、

なんと大したものだじゃねえか」

「なるほど、こいつは恐れ入った」

「この甲州という国は、昔から金が出る国なんだよ」

「そりゃわかった、黄金の話はまた後から聞かしてもらおう。

小僧さんや、あの山はありや何という山だい」

「あれか、あれは土地ではのろしほ燧台と言っているが、昔はお城があつ

たところ、今はお化けぼと狼が住んでいるんだ」

「お化けと狼が？」

「あの裏山へ廻ればお化けと狼がいるという話だけれど、こつ

ちの方を通ればそんなものは出て来やしない」

「けれども、あつちを通れば徳間の方へは近いのだろう」

「近いには近いけれど、なにも、わざわざお化けや狼に食われに行かなくてもよからう」

「そうお前のように、いちいち理窟攻めにされてはたまらない、ただ聞いてみただけのことだよ」

「だから親切に教えて上げるんだよ、燧台のろしばの後ろへは土地の人だつて行きやしない」

「そうして小僧さん、お前はお化けや狼の出るといふ山の傍で、鮪まぐろや鯨より大きな金目かねめのものを持っていて、それで怖こわくはないのかい」

「ナニ、怖いことがあるものか、悪いことをしていなけりや怖いことはねえ」

「それでもお前、その袋にいつぱい入っている黄金きんの塊かたまりを盗まれたらどうする」

「ははは」

「泥棒が、お前の後ろから不意に出て来て、その黄金の塊をよ

こせと言つたらどうする」

「ははは、よこせと言つたら遣やつちまうよ、この袋の中にある黄金なんぞは、いくらのものでありやしない」

「でもお前、大金だろう」

「ナ―ニ、これっぽち。気の利いた泥棒はこんなものに目をくれやしない、俺おいらはまだ、ウンと山の中へ隠しておくんだ」

「どこの山へ」

「そりや教えるわけにはいかねえ」

「ちつとわけてくれないかい」

「おじさん、黄金が欲しけりや、私の弟子におなりよ、一山当てれば何百万両になるんだから、泥棒よりよっぽど割がいいよ」

七兵衛はこの子供にまくし立てられてしまいそうで、思わずにがわら苦笑いをしたが、

「ときに小僧さんや、お前は金をたずねてこうして山奥を歩いているらしいが、私共はちと人を尋ねてこの山の中へ来たもんだ。お前はこの二三日に、この入いりで人を見かけなかつたかい」

「見かけたよ」

「どんな人を見かけたい」

七兵衛も少し乗気になる。

「山の娘たちを見かけたよ」

「山の娘たちというのは？」

「山の娘たちというのは、この国から出て、他国へ商売に行つて、この国へ戻る娘たちのことだよ」

「そうか、そのほかには？」

「そのほかにはお前さんを見かけたばかりだ」

「刀をさした人とか、脇差わきざしを持った人、そんな人は見かけなかつ

たかい」

「そんな人は……そんな人は見かけなかったよ」

「では、その山の娘たちというのは、どつちから来てどつちへ行つたえ」

「それは駿河の方から来て、この少し先いりの入から篠井山しのいざんの方へ廻つたようだ」

「そうか」

七兵衛はついにそれより以上の要領を得なかつたから、

「有難う、小僧さん」

「さようなら、おじさん」

七兵衛が岩を飛び越えて、また上へ登つてしまうと、暫くして金掘りかねほの少年は、

「うまく嚇おどかしてやった、人を尋ねると言つたのは大方あのこと

だろう、のろしば燧台の後ろへ行くとお化けと狼が出ると言ったら本気にしていやがった」

腕わんを袋へ納めて牛の背のような岩の上へのぼる。

「おーい」

「おーい」

高いところの七兵衛と兵馬、谷の中の金掘り少年と呼び交かわす。

「右へ、右へ」

少年が右の方を指さすのに、兵馬と七兵衛はそれを知りながら面を見合せて左へ向う。

「右へ、右へ」

少年はしきりに叫びながら手を振って、

「おやおや、あの二人は左へ廻ふじづるったな、すると藤蔓橋ばしのあると

ころを知つてるのかしら、あれを渡られるとちつと困るぞ」

上の二人は、燧台に近い細道を川沿いに、

「あの小僧、なかなか人を食つた小僧でございませぬ、この山の後ろへ廻ると、お化けと狼がいるなんぞと大人を嚇おどかす氣になつているが、どのみち近いに越したことはございませぬから、この辺をひとつ向うへ突つ切つて、この燧台の後ろへ廻つてみましよう」

「なるほど、この山は要害の山、狼火のろしを上げて合図をするに都合のよかりそうな山だ」

「左様でございませぬ、土地の人は燧台とも言うし、城山とも言うさうでございませぬから、昔は城があつたものでございませぬさう」

「あれ、あの小僧が手を振つてゐる」

「右へ、右へと怒鳴どなつてゐますな。おやおや動き出した、木の

腕が転がり落ちた、それをまた拾っている。いやあれは腕カケとも言い、揺鉢ゆりぼちとも言つて、あれで川の底や山の間を砂を淘よなげてみて金の有無あるなしを調べるんで。しかしあれだけの子供で、あれだけの慾があるのはなんにしても感心なことだ。甲州人というやつは、一体になかなか山気やまきがある。あの小僧なんぞも、あれでよく抜けたらエラ者になりそうだ。あれ、見えなくなつてしまった、また谷底へ下りたかな。おや、あの山道を駆けて行く、どこへ行く気だろう」

金掘りの少年は山の小径こみちをドンドンと駆ける、駆けながらひとりごと  
独言、

「あのおばさんが、江戸へ連れて行つてくれると言つたから、江戸へ行つてしまふんだ、こんな山の中では出世ができない、いくら黄金きんを持っていても、それを上手に使わなければ詰らね

え、黄金を上手に遣うには都へ出なければ駄目だ、山へ来て黄金を取って都へ出て遣うんだ、黄金は人に掘ってもらって、自分はいつでも都にいて、遣って儲けていた方がいいだろう。それはそうと、いま向うの岸を廻った二人連れ、あれは、どうやら劍呑だ、早く行っておばさんに知らせよう」

燧台の裏へ先廻りした金掘りの少年は、岩の間へ掛け渡した、半分は洞窟ほらあなになった小屋へ駆け込んで、

「おばさん、おばさん」

笠も袋も投げ出し、

「人が来るよ」

暗いところから面かおを現わして、こつちを見たのは、意外にも徳間峠を逃げたお絹の姿でありました。

「忠作さん、どんな人が来ます」

「五十ぐらいの合羽かっぱを着た人が一人と、それから、まだ前髪のある若いお侍が一人」

「ああ、それでは……」

お絹は、

「忠作さん」

金掘りの少年の名は忠作というらしい。

「なに」

「今あの方は寝ているから、あのままにしておいて下さい」

「ようござんす」

「それから忠作さん、お前は江戸へ出たい出たいと言っていましたね」

「ああ、おばさん、お前がつれて行ってやると言ったじゃないか」

「ええ、あの人の創きずが癒なおつたらつれて行つて上げるつもりでいましたよ」

「早く癒ればいいな」

「いつ癒るか知れないからね……」

「早く癒してやりたいな」

「早く癒してやりたいけれども、こんなところではお医者さんもなし、お薬もないから、いつ癒るんだか知れやしない」

「気の毒だな」

「それだから忠作さん、こつちへおいで」

お絹は、そつと奥の方を気遣きづかうこなしで、静かに立つて忠作を表の方へ誘い出し、耳に口を当てるようにして、

「気の毒だけれど、あの人をああして置いて、二人で江戸へ行つてしまいましょうよ」

「ええ？」

忠作は眼を睜みはつてお絹の面を見上げ、

「あんなに怪我をした人を置放しにして出かけるのかい」

「でも、いつ癒るんだか知れやしないもの」

「だって、それはおぼさん、薄情というものだろう、あの人を置放しにして出かけて行ってしまふなんて」

「そうしてもいい人なんだよ、あの人はお前、本当は泥棒なんだよ」

「泥棒？」

「ああ、泥棒で悪い奴なんだから、助けない方がかえつてためになるのですよ」

「だって、おぼさん、お前は連れの人で、道で追剥おいはぎに遭つてこんなことになつたと話したじゃないか」

「それは、お前を驚かさないうようにわざとそう言っておいたのよ、本当はあの人は泥棒で、入墨者といって、あの人をかくまったことが知れば、お前もわたしも罪になるのだよ」

「どうして、おばさんはそんな人と連れになつて来たの」

「それにはわけがあるんだけど、今お前が知らせてくれた人が来るといふのは、きつとお役人か何かだろうと思う、それで早く逃げなければお前もわたしも縛られてしまう」

「そりゃ困つたな」

「さあ、お前案内して、間道ぬけみちの方から早く逃げておくれ」

「だつておつ母かあが里へ行つてまだ帰らねえし、それから……」

「そんなことを言つてる時ではありません、甲府まで逃げれば知つた人もありますから、後はまたなんとでもなります」

「それじゃおばさん、逃げよう」

「早くそうしておくれ」

「待つておいで、大事なものを持つて来るから」

「何を持つて来るの」

「黄金きんを」

「黄金きんを？」

「穴蔵あなぐらの中に蔵かくしてあるから、あれを持つて来るよ」

「病人びやうじんに触さわらないようにね」

「ああ、いいよ」

忠作は、また奥の洞窟の方へ取つて返して一包の袋を重そうに提げて来ました。

「これだよ」

「中に何があるの」

「黄金」

「黄金というのは、あの小判こばんにするお金のことなの」

「そうだよ」

「どうしてそんな物を持っているの」

「俺おいらの死んだ父ちやんと俺らと二人で、山や谷を探して見つけ出しておいたものだよ、これだけあればお婆さん、三年や五年は楽に暮して行けると言ったよ」

「それがみんな黄金なら大したもの、三年や五年どころではない、一生、楽に暮して行けるかも知れない」

「それではお婆さん、これを持って行こう、きつと江戸へつれてつておくれ、江戸へ行ったらこの黄金を売ってお婆さんにもお礼をするから」

「そんなませたことを言うものではありません、さあ、それを持ったら早く」

「間道ぬけみちから、おばさん、万沢へ出ようよ、その方が順だから」

「どつちでもお前のいいように」

「けれども、あの人を一人で置くのはかわいそうだな」

「大丈夫だよ、今に役人が来て、つれて行ってしまふから。ぐずぐずしているとこつちが危ないのだから」

「それでは……里へ行つてるおつ母かあが帰つて来ると心配するだろうから」

「だって当分は帰らないと言つたそうじゃないか」

「二月ほど経つたら帰るかも知れない」

「そんな暢気のんきなことを、聞いてはいられない」

「おつ母は里へ行つて、またほかの人にお嫁に行くんだと言つていたから、もうここへは帰らないのだろう」

「それでは誰も心配する者はないはずだから、早く行きましょ

う」

「江戸はいいところだろうな、人の話に聞いたばかりで、早く行って見たい見たいと思つたが、今日はおばさんに連れて行つてもらえるかと思うと、こんな嬉しいことはないけれど、この小屋も住み慣れてみると何だか惜しいような気がするね」

この場合に、江戸へ行きたがつていた少年の心をお絹が心あつて焚たきつけるので、少年はすっかりその気になつて、大急ぎで旅立ちの用意をします。このとき奥で、

「御新造、いやお絹さん」

譫言うわごとのような声、これはがんりきの声。

「何か言つてるよ」

耳を澄ますと、

「御新造、いやどうも」

二人は面を見合せて、

「あれ、また何か言っている」

奥では引続いて、

「いよ、お二人様」

二人は奥を見込んで、

「眼が醒めたのかしら」

奥の声、

「もうこつちのものだ」

お絹忠作はニツコリと笑って、

「魘うなされているんだよ」

奥では、つづいて、

「これからがこつちの世界と出る、へん、甲州ばかりは日が照らねえ、入墨がどうしたと言うんだ、これから御新造をつれて、泊

り泊りの宿を重ねて鶏とりが鳴く東あずまの空と来やがる、嫉やくな妬そねむな、おや抜きやがったな、抜いたな、お抜きなすったな、あ痛いてッ、あ痛うぬッ、斬うぬつたな、汝うぬ、斬りやがったな」  
が、んり、きの謔うわごと言ことは嵩こうじてくる。その間にお絹は忠作そそのを嗾そかして、この小屋を逃げ出してしまいました。

五

今宵こよいは月がよく冴さえている。主婦あるじのお徳は庭へ出て砧きぬたを打うつていると、机竜之助は縁に腰をかけてその音を聞いています。  
ここは篠井山しのいざんの山ふところ、お徳というのは先日、峠の上で竜之助を助けて来た「山の娘」たちの宰領さいりょうであります。

お徳は美しい女ではないけれども、いかにも血色がよく働き

ぶりのかいがいしい三十女。ここでも紺の筒袖つっそでを着て、手拭かぶを被かぶつて砧を打つと、その音が篠井山の上、月夜段つきよだんの奥までも響いて、縁に腰かけた竜之助の足許から股もものあたりまでが、軽い地鳴りで揺れるのがよい心持です。

「ほんとにお見せ申したいくらいでござんす、今日のこのお月様を」

お徳は砧の手を休めて、竜之助の方を向いて絹物の裏を返す。

「せつかくなことで。月も花も入用いりようのない身になったけれど、それでも物の音だけはよくわかります。いや、眼が見えなくなつてから、耳の方が一層よくなつたようじゃ。そうして御身がいま打つ砧の音を聞いていると、月が高く天に在つて、そしてそこからあたり一面には萩の花が咲きこぼれているような心持がします」

「萩の花は咲いておりませぬけれど、ごらんなきいませ、この通り月見草が……」

「月見草が……しかし、やつぱり見ることはできぬ」

「そうでござんした……月見草はよい花でございます」

「あれはさびしい花であるが、風情ふぜいのある花で、武蔵野の広々したところを夕方歩くとハラハラと袖にかかる、わしはあの花が好きであつた」

「先せんの人もこの花が好きだと申して、山から取つて来ては、この通り庭いっぱいに植えたのでございます」

「御身の先せんの良人つれあいという人は、なかなか風流人であつたと見える。武術の心がけもあつたようであるし、文字の嗜たしなみもあつたというのに、その上こうして庭に花を植えて楽しむというのは、こんな山家住やまがずまいには珍らしい人であつたようじゃ」

「もとからこの山家の人ではございませんでした」

「どこから来た人？」

「上方の方から参りました、いいえ、縁もゆかりもない人で、ふとした縁から一緒になつてしまつたのでございます」

「甲州は四方山しほうの国、思いにつけぬ人が隠れているそうじゃ。そんなことはどうでもよいが、甲州といえば、わしが生国しやうごくはその隣り。ここへ来ると、わしもどうやら故郷へ来たような心持がして、この山一つ向うには、懐しい親子が待つているように思われてならぬわい」

「御尤ごもつともでございます、なんとかして早くお帰し申すようにして上げたいと……でも当分は、おうちのつもりで御休息をなさいます」

家の奥の方でこの時、書物を声高こわだかに読む子供の声がします。

「よく勉強していますな。あの子は性質たちのよい子じゃ、よく育ててもらいたいもの」

竜之助は、奥の間で本を読んでいる子供の声に耳を澄ましている様子です。

子供は三字経さんじきょうを読んでいるものらしい。

「養うて教へざるは父のあやまち

教へて嚴ならざるは師のおこたり」

というような文句が断続きれぎれに聞えます。

「今はもう、あの子の成人するばかりが楽しみでございます。

他国よそへ出る時はお隣りへ預けて参りますが、それでも感心に手習や学問に精を出してくれませうから。なに、こんな山家で学問なんぞをと申しますけれど、死んだ良人つれあいが、この子はぜひ世間に出してやりたいと申しておりますものですから」

母もやつぱり、わが子の読書の声を嬉しがって聞き惚れていきます。やがて読書の声が止んで、しばらくして裏口からハタハタと駆け出して来た子供。

「お母さん」

「蔵太郎くらたろうかえ」

「ああ」

月見草が咲いた中から、面かおを出した六歳ばかりの可愛らしい男の児。

「おじさんもいるの？」

「おじさんもここでお月見を……お前も来てあのお月様をござらん」

お徳はわが子を縁側の方へ麾さしまねく。

「月見草がよく咲いてるね」

と言つて、子供はその花を一つ撈むしる。

「あ、これ、その花を取つてはいけません、それはお前のお父さんが大好きな花なのだから大切にしないで」

「でも、こんなにたくさん咲いているから一つぐらい」

「一つでもいけません、せつかく、月見草がお月見をしているものを、摘み取るのはかわいそうですよ」

「花が月見をする？ それはおかしいね、母さん」

「ごらん、この月見草という花は、日が暮れるとこんなに咲いて、日にあたると凋しぼんでしまうのだから。お月様の好きな花、そうしてお月様に好かれる花」

「坊は、こんな花よりも桜の花や、つつじの花が好きさ」

「お前のお父さんはまたこの花が好きであつたのだから、お前も好きにおなり」

「それでは好きになろう、この花と一緒にお月見をしよう」

「それがよい。そんならおじさんの傍へ行つて、縁側へ腰をかけてお月見をしながら、また戦人いくさびとの話をおもらいなさい」

「そうしよう。おじさん」

子供は勇んで竜之助の傍へ来る、竜之助は黙つてその頭を撫なでる。

「おじさん、お前は眼が見えないのだろうか？」

「ああ、眼が見えない」

「それでお月見するのはおかしいね」

「それでもその月見草でさえも、眼がなくてお月見をしているではないか」

「そうだな、眼がなくても月が見えるだろうか知ら」

「それは見える」

「では、この月見草の花は、どんな色をしているか当ててごらん」

「黄色い色をしている」

「よくわかるね。それではおじさん、坊がここへ字を書くから、その字を読んでごらん」

子供は棒切れを取って竜之助の足許あしもとの地面へ大きく文字を書いて、

「さあ、何という字を書いた」

「それは読めない」

「それごらん」

「どうにも、おじさんにはそんなむずかしい字は読めぬ」

「教えてあげようか」

「教えてくれ」

「いや」

「教えてくれ」

「いや」

「その字が知りたい」

「教えればおじさん、戦人いくさびとの話をしてくれる？」

「焦じらすものではない、早く教えてくれ」

「蔵太郎や、おじさんを焦じらさないで早く教えてお上げ」

「それでは教えて上げよう、いま書いたのは月という字」

「ああ、月という字——そう言おうと思つていたところ」

「聞いてから言つても駄目。それではおじさん、戦人のお話をしておくれ」

「おじさんに戦人の話をしてもらうより、お母さんに歌を聞かしておもらい」

「お母さんに歌を？」

「お前のお母さんは歌が上手であつた。話は家の中であるもの、歌はこういうところであつたうのがよい」

「それではお母さん、歌をうたつて聞かせておくれ」

「母さんに歌などがうたえますことか。それはおじさんが嘘をおつしやるのですよ」

「嘘ではない。峠から下りて来る時、山駕籠の中でうつつに聞いていたがよい声であつた。あれをひとつ、この月の晩にここで聞かしてもらいたい」

「まあお恥かしいこと、あんなのは歌でもなんでもありやしません、魔除まよけにああして声を出し歩くだけのことで」

「そうではない、土地の歌は土地の人の口から聞かねば情合じようあいがない、あの、甲州出がけのという歌、あれを駕籠の中で聞いて

いた時に、わしはなんとなく腸はらわたに沁しみるような心持がした、ぜ  
ひもう一度、聞かしてもらいたい」

「甲州出がけの吸附すいつけたばこ煙草なみだじめ、涙湿りなみだじめで火がつかぬ……あれでござ  
いますか」

「そうそう、それにもう一つは何と言ったか、生れ故郷の……  
という歌」

「生れ故郷の氏神うじがみさんの、森が見えますほのぼのと……あれで  
ございますか」

「それぞれ、どうかあれをひとつ聞かしてもらいたい」

「ああいう時の調子では音頭取おんどとりも致しますけれど、改まつてど  
うしてお聞かせ申すことができますものか」

「そのように言わずにぜひ頼む……月があつても光が見えぬ、  
花があつても色の見えぬ身には、声と音を聞いて楽しむよりほ

かに道がない、どうぞその歌を聞かして拙者の心を慰めてもらいたい」

「そうおつしやられると……」

お徳は竜之助の面かおを仰いで見て、気の毒そうに、

「それでは、歌つてお聞かせ申しませぬ、お笑いなすつてはいけませぬ」

「どうぞ頼みます」

お徳は槌つちを取り直して軽く拍子を取りながら、

甲州出がけの吸附煙草

涙じめりで火がつかぬ

旅をして歩く時に興に乗じてうたう歌、危険な山坂りしゆうを超ゆる時、魔除まよけを兼ねて歌いつけの歌、心なく歌つても離愁りしゆうの思いが糸のように長く引かれる。

「ホホホ、こう歌いますと、なんとなくじょうあい情合がこも籠っているよう  
でござんすけれど、この替歌かえうたに……」

と言ってお徳は直ぐに、

甲州出る時や涙で出たが

今じゃ甲州の風もいや

と歌い、

「こうなつてしまいますから薄情なもので……まだわたしたち  
の中でうたいます歌にこんなのが」

道中するからお色が黒い

笠を召すやら召さぬやら

それから最後に、

生れ故郷の氏神さんの

森が見えますほのぼのと

三十を越したお徳も、土地の歌をうたう時は乙女の心になる、  
鄙ひなの歌にも情合が満つれば優しい芽が吹いて春の風が誘う。

六

山の娘たちはいったん帰つて来たけれど、また暫らくして旅  
に出かけなければならなくなりました。今度は郡内ぐんないから東の方  
へ出ようということになりました。隣り隣りというてもなかなか  
か遠い、山の間あいや谷の中から娘たちがゾロゾロと集まつて、お  
徳の家へ詰めて来ながらの話、

「わたしが思うのには、お徳さんは今度は出かけられないかも  
知れませんか、もしお徳さんが出かけられなければ、組かしらの頭は  
お浪さんになつてもらわなければならぬでしょう、まあお徳

さんの了見りようけんを聞いてみてからのこと」

「お徳さんは、あのお武家さむらいさんをどうなさるつもりでしょう。あのお武家さんはお眼が悪い上に、お身体も本当ではないのを、お徳さんが引受けてお世話をなさると言っておいでだが、お徳さんはお世話好きだからよいけれども、もしあのお武家が悪い人であつたらどうでしょうね」

「お徳さんは、きつとあのお武家を好いているのですよ、ついこの間の晩も、庭でもつて歌をうたつて聞かせていましたよ、それに蔵太郎さんもあのお武家なつに懐いているから、まるで夫婦と親子のように見えました」

「ほんとに、お徳さんは好いているならば、あのお武家と一緒になつたらどうでしょう、お武家さんの方でもいやでなければ、みんな取持つてお徳さんにゆうふに入夫をさせたらどうでしょう」

「わたしもそう思っていましたけれど、お徳さんが今までよく立て通して来たものを、こちらからそんなことを言うのはおかしいし、それにあのお武家はお眼の不自由な人、あれでは始終お徳さんの面倒めんどうを見ることもできませんまいし」

「たとえお眼が不自由でも、お徳さんが好いたと言い、お武家さんの方でもその気ならば出来ない縁ではありません。ねえ、皆さん、男一人を立て過つごせないような女では詰つりませんね」

「働き者のお徳さんのことですもの、あれで立派に通して行かれますよ、誰かお徳さんの了簡りょうけんを聞いてみてごらん」

「そんなことが聞かれるものかね、お徳さんはそんな了簡で、あのお武家のお世話をしてるのではありません、ああしてお身体が少し好くなったら、直ぐにみんなして送り返すつもりではありませんか」

「それはそうだけれども、この前のお方もそうして出来た縁、今度もひよつとすると、不思議な縁にならないとも限りませんか  
らね」

「前のお方がああいうお方でありましたからお徳さんの入夫は  
むずかしいと思うていたところ、ちようどまたああいうお武家  
が来て、やつぱり縁というものですね、せめてお目でも悪くな  
ければお取持ちをして上げたい」

「お目が悪いからかえつて縁がよいのでしよう、満足なお武家  
さんがどうしてこんな山家やまがへ入夫に来るものですか」

「それにわたしは、あのお武家はお目が悪いばかりではなく、何  
か悪いことをして来たお方ではないかと思ひますよ」

「どうして」

「どうもなんだか気の置けるようで……もし人殺しなどをして

来た人であつたら」

「それはなんとも言えませぬ、もしそうであつたからとて、お徳さんが承知であれば仕方がないではないか」

「でも、もし悪いことをして来た人で、お役人に尋ね出されるようなことになる、お徳さんや蔵太郎さんにまで、縄目なわめがかかるようなことになりはしないか知ら」

「その時は、お徳さんばかりではない、あるとき峠を通つたものはみんな同罪、お前とわたしも逃れることはできませんね」

「どうなるものですか、やくざ男に欺だまされるのは山の娘の名折れだけれど、世間に憚はばかる人を助けるのは山の娘の気負きおいだとき。なんにしてもお徳さんの心の中を聞いてみて、それからのことにしましうよ」

「それがようござんすよ」

山の娘たちは隊をなして、また他国へ出かけていったが、果してお徳だけは残ってしまいました。お徳は後に残ったのみでなく、それから直ぐに竜之助を案内し、蔵太郎をつれて、篠井山の麓から奈良田の温泉へ行つてしまいました。

それは盲目の竜之助を馬に乗せて、お徳は蔵太郎を背に負つて、篠井からまだ十里も山奥になつてゐる奈良田へ行く間に、お徳はいろいろとその土地の物語をしました。

「昔、奈良の帝様みかじさまがおうつりになつたところで、それから奈良田と申します、今でもその帝様の内裏だいりの跡が残つていたのでございます」

「奈良の帝？ 左様なお方がこんなところへおいでになる由よしもなかりうに」

「それでも昔からそのように申し伝えられてあるのでござんす、おいでになつてごらんになればわかりますが、山と山とで囲まれた村の真中に二丁ほどの平らなところがあつて、そこに帝様のお宮のあとが今でも神様に祀まつつてあるのでござんす」

「帝様と申し上げるのは日の下を知ろし召すという方じゃ、その方がなんで斯か様なところへおいでなさるはずがない、大方その帝様のお社やしろをそこへお移し申したのであろう」

「そうではござんせぬ、奈良の帝様が、たしかにその地へお移りになつたということとでござんす、その帝様は女のお方様で……」  
「女の帝……奈良朝で女の帝に在おすのは」

「竜之助は自分の持っている国史の知識を頭の中から繰り出して、お徳の語るところと合せてみようととして、

「奈良七重……奈良朝は七代の御代みよということだが、そのなか

で女の帝様は……」

竜之助の思い浮ぶ知識はこれだけのもので、その七代のうちにどのお方が女帝におわしまし、その御名をなんと申し上げたかというところまでは届かないのです。

「その帝様が、これへお越しになりました、この土地は山国で塩というものがござんせぬ故、帝様は天にお祈りなされると、地から塩が湧いて出て、今も塩の井というのがある土地にござんす。それから片葉の蘆というのがござんす、帝様がこの土地へおいでになつてから、旦暮都の空のみをながめて物をおうておいであそばした故、お宮のあたりの蘆の葉がみんな片葉になつて西の方へ向いていたということとござんす」

身延と七面山の間を越えて葉袋というところへ出た時分に、お徳は右手の方を指しながら、

「あちらから来る道が、富士川岸を伝うてやはり奈良田の方へ通うのでござんす、帝様へ諸国から貢物を献上みつぎものなさる時は、いつもこの道を通つたとやらで、その帝様が奈良田でお崩れかくになりました時、それと聞いて土地の人が、その貢物を横取りしてしまつて俄にわかに富んだから、その村を飯富村いいとみといつて、あちらにはまた御勅使がお通りになつた御勅使川みてしがわというのがござんす」

お徳は、やはり奈良の帝がこの土地へおうつりになつたという伝説をそのままに受入れてゐるらしいが、竜之助は、ただ伝説として聞いておくだけに過ぎません。

「お宮のあるところから十里四方は、いつの世までも年貢お免ゆるしのところ、権現様ごんげんさまも湯の島へ御入湯の時に御会釈ごえしやくでござんした。たとえ罪人でもあの土地へ隠れておれば、お上かみも知つて知らぬふりをなさんすとやら」

お徳は伝説をようやくに事実の方へ近づけてきます。

奈良田の皇居ということとは国史以外の秘説であります。

奈良王この地に御遷座ありしという伝説は、ここにお徳の口から伝えらるるばかりではなく、幾多の古書にも誌しるされてあるので、その奈良王とは弓削道鏡のことであるとの一説、ただに奈良の帝と伝えられている一説、また明らさまに人皇にんのう第四十六代孝謙こうけん天皇と申し上げてある書物もあるのであります。

孝謙天皇は女帝におわします。弓削道鏡の悪逆、和氣清麻呂わけのきよまろの忠節などはその時代の出来事でありました。

けれども、天皇がこの地に御遷座ありしというようなことは、正史のいずれにも見らるるところではなく、ただこの地の伝説だけに残っているであります。

村の中程に皇居の跡があるということ、塩の井、片葉の蘆、飯

富村、御勅使川、十里四方万世無税、家康湯の島へ入湯のこと、みんなそれに付きまとうた伝説でもあり事実でもあるが、なおそのほかに、帝にお附の女房たちが、散々ちりぢりになつて、このあたりの村々で亡くなつた、それを神に祭つて「きさき後の宮」と崇めてあること、帝が崩御ほうぎよあそばした時、神となつて飛ばせ給うところの山を「てんしたけ天子ヶ岳」と呼び奉ること、そんなこんな伝説がいくつも存在しているこの山の奥、人を隠すにも隠れるにもよいところ、ことにその地には百二十度の温泉がある——お徳の温い心、いつも冷たくなつてゐる竜之助の心を、そこで温かにしてやろうという世話ぶり、その世話ぶりがいつまで続くか。竜之助が温かい人になることができないうまでも、お徳のような温良な山の女を冷たい人にはしたくないものです。

湯の島へ着いて、ゆつくりと温泉に浸つた机竜之助。

「ああ、いい気持だ」

木理もくめの曝ざれた湯槽ゆぶねの桁けたを枕にして、外を見ることのできない眼は、やつぱり内の方へ向いて、すぎこし方かたが思われる。

「三輪明神の社家しゃけ植田丹後守の邸に厄介になつていた時分と、ここへ来て二三日逗留とまりゆうしている間とが、同じように心安い。どうも早や、おれも永らく身世しんせいひようろう漂浪の体じゃ、今まで何をして来たともわからぬ、これからどうなることもわからぬ。それでも世間はおれをまだ殺さぬわい、いろいろの人があつておれを敵にするが、またいろいろの人があつておれを拾うてくれる、男の世話にもなり、女の世話にもなる、世話になるということは誉ほまれのことではあるまい、いわんや一匹の男、女の世話になつて旅をし病を養うというのは、誉ではあるまい、それを甘んじているおれの身も、またおかしなものかな。おれは女というも

のではお浜において失敗しくじった、お豊においては失敗しくじらせた、東海道を下る旅、道づれになつたお絹という女、あの女をもまた、おれはよくしてやつたとは思わぬわい。おれは女に好かれるのでもない、また嫌われるのでもない、男と女との縁は、みんな、ひよつとした行きがかりだ、所詮しよせん男は女が無くては生きて行かぬものか知ら、女はいつでも男があればそれによりかかりたいように出来ている。恋こひというのは刀と刀とを合せて火花の散るようなものよ、正宗まさむねの刀であろうと竹光たけみつのなまくらであろうと、相打てばきつと火が出る、一方が強ければ一方が折れる分のことだ。おれをここまでつれて来て湯に入れてくれる女、それはあの女の親切というものでもなければ色恋いろこひでもなんでもない、ちようどあの女が夫を失うて淋さびしいところへ、おれが来たから、その淋しさをおれの身体で埋めようというのだ、おれが

山家の樵夫きこりや炭焼でない限り、それであの女の珍らしがり方が多い分のこと。しかしおれには人の情を弄もてあそぶことはできない、親切にされれば親切にほだされるわい。いつそ、おれは、あの女の許もとへ入夫にゆうふして、これから先をあの女の世話になって、山の中で朽くちてしまおうか」

竜之助はこんなことを考えていると、

「やあ、吉田竜太郎殿ではないか」

浴室の外から呼ぶものがありました。

その声で、竜之助は空想を破られる。

「わしを吉田というのは？」

「君は眼が悪いのか、眼をどうしたかい」

「この通り眼が見えない」

「眼が見えなくても声でわかるだろう、拙者の声がわからんか」

「聞いたような声じゃ。おお、山崎ではないか」

「そうじゃ、山崎じゃ。久しぶりで意外なところで会ったな」

「全く意外なところ。おぬしはあれからどうしていた」

「いや、おぬしこそどうしていた、この物騒ものさわがしい世の中に悠々

として湯治とうじとは」

「これにはなかなか長い物語がある、湯から出て、ゆつくり話  
そう」

「それよりも、その眼をどうしたのか、それを聞きたい」

「これは十津川とつがわでやられた。京都から引返して来るときに、伊  
賀の上野で天誅組の壮士というのに捉つかまり、それと一緒になっ  
て十津川へ後戻り、山の中で煙硝えんしょうの煙に吹かれてこうなっ  
てしまった」

「それは気の毒、全く見えないのか」

「初めのうちは少し見えたが、今は全く見えない」

「そりや災難じゃ、なんとか療治の仕様もありそうなものじゃ」  
「療治も相当にやってみたが、本来、天のなせる罰ばちが報むくうて来たのだから」

「罰？ 気の弱いことを言うな」

「どうも人間業にんげんわざでは癒るまいよ。それがために世間のことは一向わからぬ、近藤や土方は無事でいるか、芹沢との折合いはどうじゃ」

「君はそれを知らぬか、いやそりや、大変なことじゃ、四方八方、蜂の巣を突きこわしたようなもので、どれから話していいか」

「そうだろう」

山崎と呼ばれた男は易者えきしやのような風をしていたが、浴室の中

へ入つて来て小さい声で、

「まず第一、芹沢が殺されたことを吉田、お前は知っているか」

「芹沢が……誰に」

「仲間に殺された」

「仲間の誰に」

「仲間といえたい見当がつくだろう。芹沢が殺されると、近藤が新たに新撰隊というのを組織してその隊長になって、土方が副将でそれを助けることになった」

「うむなるほど、いやあれば、どちらかそうなるだろうと思う  
た」

「それから次が四条小橋、池田屋騒動の一件だ。血の雨を降らしたことを降らしたと、貴殿もいたら、みっちり働き甲斐のある仕事であつたわい」

「浪人を斬ったのか」

「斬った斬った、今でも池田屋へ行つて見ろ、天井も壁も檜の穴でブスブス、血と肉が、あつちこつちにべたべたと密着くっついているわい」

「そうか」

「それにまた一方では、拙者の郷里水戸の地方に筑波山つくばさんの騒ぎが起つてな」

「筑波山の騒ぎとは？」

「それも知らないのか。水戸の家老武田耕雲斎が、天狗党というのを率いて乱を起した、それやこれやで拙者は関東と京都の間を飛び廻つてゐる、ことに甲州の山の中にめざす者があつて、ここへ来たわけじゃ」

竜之助に向つてこういう話をする男、これは新撰組の一人で

山崎讓ゆずるという男、かつて竜之助が逢坂山おうさかやまで田中新兵衛と果し合  
いをした時に、香取流かとりりゅうの棒を振ふるつて仲裁に入つた男、変装に巧たく  
みで、さまざまの容姿なりをして、壬生みぶや島原の間、京洛けいらくの天地を  
探つていた男。

「ともかく、湯から上ろう、もつと委くわしい話を聞かしてくれ」  
山崎讓は後刻を約して、そこを立ち去つてしまふと、それと  
入り違えのようにお徳が入つて来ました。

「そうしておいで遊ばせ、今お背中を流して上げますから」  
湯から出ようとすゝる竜之助の傍へ寄つて、手拭を固く絞つて  
お徳は、その肩へ手をかけて背中を洗つてやろうとします。

「それは気の毒」  
竜之助はお徳のなすままに任せて辞退もしない。

お徳は筒袖をまくり上げて、裾が湯に濡れないように気をつ

けながら、竜之助の背中を流しはじめていると、この温泉の上の方で賑わしい人の声。

「あれは何だろう」

「あれはお慶めでたいことでござんす」

「はあ、何か人寄せがあるな」

「この山の上の望月もちづき様という郷土ごうし様のお邸へお嫁様が参りなさるそうで」

「婚礼があるのか、道理でさいぜんから時々賑わしい人の声が聞えると思うた」

「望月様は、この辺の山を預かる御大家でござんすから、もうこの近所の人みんなよばれて朝から大騒ぎ、今夜もまた夜徹よどおし飲み明かしなさるのでござんしよう」

「それは盛んなことじゃ。そうして嫁御寮よめごりようはもうこつちへ着い

たのか」

「お嫁さんは前の日、わたしもちらと見ましたが、山家やまがには惜しい器量のお嫁様でござんした」

「どこから来たのじや」

「同じ甲州でござんすけれども、ここからはだいぶ離れておりまして、萩原領の八幡村やわたというところからお輿入こしいれでござんすことやら」

「八幡村？」

竜之助は何をか思い当つて、

「八幡村というのは、石和いさわと塩山えんざんに近いところではないか」

「左様でござんす、左様でござんす、あちらの入いりでござんす」

「その八幡村からここへ嫁入りに来たのか」

「はい、向うもなかなか大家だそうでございますが、こつちは

それよりも大家で、お眼が見えればすぐおわかりでござんすが、白壁作りの黒堀くろべいで、まるでお城のような構え、権現様よりもずつと前から、この近辺の金の出る山という山を、みんな預かつているお家柄でござんすから、ああしてお祝いも続いたのでござんす」

「なるほど」

いま会った山崎讓の話では、関東も関西も鼎かなえのわくのような騒ぎ、四海うちの中が浮くか沈むかという時勢であるそうな。それにこの山里では、お嫁取りの飲み明かし歌い明かし、そぞろにその泰平のどかさにほほ笑まれるのであったが、その来る嫁というのが甲州八幡村と聞いて竜之助は、また思わでものことを思わねばならぬ。それは、わが身にとつて悪縁の女、お浜の故郷が、やはりその八幡村であつたからであります。

「そのお嫁さんを一目見たいものだな」

「それはお目にかけていくらいの美しいお嫁様で」

竜之助は冗談のように言うとお徳は本気で答える。

「八幡村というところには、わしの親類……でもないが知合いがある」

「ああ、そうでござんすか、それではことによると、あのお嫁さんも御存じのお方かも知れませぬ」

「いいや知るまい、私はその八幡村というところへ行つたことはないのじゃ、ただ懇意な人の口から聞いて知っているばかり」

「左様でござんすか、いずれ明日にも、お嫁様のお里帰りがあ  
るでござんしょうから、その時ごらんになると……そのとき誰  
かにお聞きなすつてみましたら」

「別に聞いてみたいこともないのだが、なんとなくそのお嫁様

を一目見たいような気持がする」

その夜、竜之助は山崎讓と夜更よふくるまで語り合つたが、山崎は竜之助にいろいろと忠告をしたり、早く故郷へ帰るようには、道中の不便があらば、知合いの甲府の勤番きんぱんに頼んでやると親切に言つたが、竜之助はなんとも別に定まつた返事をしなかつたけれども、先を急ぐ山崎は若干の見舞金と、甲府の勤番へ宛てての竜之助の身の上依頼状などを認めてしたたおいて、その翌日、ここを立つてしまいました。山崎を送つた竜之助は、ひとり宿の二階の欄干に凭もたれていると、

「あれ、お嫁様が」

という遽にわかの騒ぎ。

「あれが望月様の若奥様。まあごらんなさい、あの髪の毛、あのお面色かおいろ、あの髪飾りの鼈甲べつこうの、水の滴したたるような襟足えりあしの美しさ、

あのお紋付、あのお召物、あの模様……ほんにお館様やかたさまのお姫様  
とても、これほどのことはおありなさるまい」

姦かしましい人の声。ははあ、これが、いわゆる八幡村から来たとい  
う嫁御寮、ただでさえ物見高い嫁入騒ぎ、このあたりの大家  
ということであるから、物珍らしい山家の人には、さながら信  
玄公の姫君でも御入来ごにゅうらいになったように騒ぐのだなと思つてい  
るところへ、お徳が入つて来て、

「さあ、あれが先程お噂うわさを申しました、望月様のお嫁御寮、あ  
なた様が一目見たいとおっしゃったお方、いま直ぐこの下を通  
りますのでございます」

お徳は手を拭きながら、これも御多分に洩れず、珍らしそう  
に息を弾はずませて飛んで来て、竜之助のいる二階の欄干から下を  
見て、

「あれで十九。十九にしては落着きがおあり過ぎなさるほど。それはお人柄ひとがらがよいからでござんしよう、お婿様むこさまよりは一段勝まさつておいでなさる、お婿様は好いお人だけれど、なんだかそれほどに威がないようなお方、それがかえってよろしゅうござんしよう。何しろあの大家を踏まえて行くには、旦那様よりも奥様が、これからしつかりあそばさなくてはなりません、好いところへお嫁入りすればするほど、お仕合せしあわせもお仕合せだがお骨も折れましよう」

お徳が、こんな独言ひとりごとを言っている間に、嫁御寮の一行はゾロゾロとこの家の下を通り過ぎて行つてしまいます。

「ほんとうに、あんなお嫁様をお持ちになつたお婿様の果報が思いやられます、お里帰りの五日が、どんなにお待遠しいことでしょう、両方の親御さんたちも本当にこれで御安心。ああい

うことを見ますと、ひとごとでも嬉しくてたまりませぬ」

「里帰りといえ、これからあの八幡村まで帰るのか」

「左様でござんす、お馬やら釣台つりだいやら、あとからあの通り続いて参りますが、なんでも御旧家のこと故、すっかり古式でやるのだそうでござんす」

「いや婚礼というものは、慶めでたいことではあろうけれど、なかなか手数のかかるものじゃ」

「誰でも一生に一度は、その手数をかけねばならぬものでござんす。あなた様なぞもさだめし、こんなにおなりなされぬ前は、あんな手数をかけて、お喜びになったものでござんしょう」

お徳は愛嬌あいぎょうよく言う。

「あたりまえならば、そんなことになるのであつたらうが、わしのはあたりまえの道を失ってしまったから、それで更に手数

がかからなかつた」

七

旗本の神尾主膳かみおしゆぜんはお預けから、とうとう甲府勝手かつてに遷うつされてしまつて、まだ若いのに、もう浮む瀬もない地位に落されたが、当人はいっこう平氣らしくあります。

地位の変つたことは平氣らしいけれども、うまい酒の飲めないことが何よりの苦痛と見えて、もとのように江戸の真中で馬鹿遊さくらちようびをするようなことができないで、時時折助おりすけを引っぱつて桜町へ飲みに来たり、こつそりと柳町やなぎちようへ遊あそびに出たりするくらゐのことで、毎日おもしろくもない甲州の山ばかりを睨にらめて暮らしていましたが、今宵もそのお氣に入りの折助をつれて柳町

の旗亭<sup>きてい</sup>へ飲みに来ていました。

「権六<sup>ごんろく</sup>、なんだか酒が酸<sup>す</sup>っぱいなあ」

権六というのは折助の名、これは江戸から附いて来た渡り者の折助であります。

折助の前身には無頼漢<sup>ぶらいかん</sup>もあれば、武士の上りもある。この権六は権六が本名でなくて、もう少し気の利いた名前のありそうな折助、前身は百姓町人でもなく、生<sup>は</sup>え抜きの無頼漢でもなく、ともかく神尾が引っぱり廻して酒の相手をさせるだけのこたえはありそうな折助であります。

「へへ、どうも仕方がございません」

権六はお流れを頂戴する。

「うまい酒を飲みたいなあ」

「御意<sup>ごい</sup>の通りでございます」

「何かうまい酒を飲むような工面くめんはないかなあ」

「左様でございますねえ」

二人は睨めくらをする。

「貴様の面つらも変らねえ」

「殿様もこのごろはおいとしゅうございます」

「はははは」

睨めつこをして淋しく笑う。なるほど、これでは酒もうまく  
なさそうです。

「女を呼んで、一騒ぎ騒がせましょうか」

「それもこのごろでは張合ふじこうつこういが無いわい、甲府の女どもにまで  
懐都合ふじこうつこうを見透みすかされるような強こわもてで、騒いでみたところがは  
じまらない、やつぱり貴様の面かおを見ながら飲んでいる方がよい」  
「いよいよ以ておいとしゅうございます、春や昔というところ

でございますねえ、笠鉾かさぼこの下でお文ふみを読んでおいでなさる覆面のお姿が眼にちらついてなりませんよ。大門口おおもんぐちの播磨屋はりまやで、二合の酒にあぶたまで飯を食って、勘定が百五十文、そいつがまた俺には忘れられねえ味合だ」

「権六、どう考えてみても、どのみち金だな、金が欲しいな」  
「それに違いございませぬ、色と金、二つにわけて申しますが金があつての色でございますよ、金さえありやあ……」

「金が欲しいな」

「金さえあれば、殿様をまた昔の殿様にしてお目にかけますがなあ」

「金があれば、権六を昔の権六にしてやるのだが」

主従はまた面かおを見合せる。

「金というやつは、こつちでのぼせればのぼせるほど向うが逃

げて行く、上手じょうずに使つかえる奴やつのところへは出でて来こないで、薄馬鹿うすばかのような奴やつを好このいてウンと集あまる、始末しまつの悪わるいやつだ」

「あるところにはある……もんでございますが、無なえところところには逆さかさに振ふつても無なえ」

「あるところにはある……権六、そのありそうなところを知しつてるか」

これは別に意味いみがありそう。

「ありそうなところ……とおつしやいまして、そりやまあ、ありそうなところには……」

「甲州きんは金きんのあるところだ」

「そりや、どこにしましても、あるところにはありますな、甲府も御城内ごきんざうの御金蔵ごきんざうへ参まれば唸うなるほどお金もございませうけれど、そりやあるだけのこと、よし御金蔵ごきんざうで金かねが唸うなつて悶搔死もがきじ

をしていようと、手を出すわけにはいきませんからな」

「誰も御金蔵へ手を出せとは言わない、御金蔵のほかに甲州で金のあるところを、権六、貴様は知ってるだろう」

「御金蔵のほかにお金のあるところ、はてな、それは物持ちのところには、相当のお金があるでございましょうよ、それがあつたにしてみたところで、やっぱり詰りませんな」

「権六、性根しょうねを据えて考えてみる、公儀の金や町人の金銭に眼をつけたところで始まらないじゃないか、誰が取つてもさしさわりのない金がこの甲州にはウントあるのだ、言つて聞かすまでもなく、その金は山の中にある、信玄公もそれを掘り出した、とうしょうこんげん東照権現もそれを掘り出した」

「なるほど」

「宝の山に入りながら手を空むなしゆうしているというのはこのこ

とではないか、甲州という金の出る国に来ていながら、おたがいにかおこうして面を見合つて金が欲しい金が欲しいと溜息ためいきをついているのが愚の骨頂こつちようだ」

「それは御意の通りでございますが、山ん中の金は見つけるのが事で、掘り出すのがまた事で、それを吹き分けるのがまた一仕事でございますからなあ」

「はははは、権六、貴様も根っから正直に物を考える男だ。まあ近く寄れ、もつと近く寄れ、手を濡らさずに、山の中から金を見つけて、掘り出して吹き分けて使いこなす仕組みがあるのだ」  
「へえ、それは耳寄りでございますねえ」

権六は主膳の近くへ膝に行じり寄る。そうすると主膳の声がいつそう低くなつて、権六のほかは何人にも聞き取れない声で、  
「実はな、御支配の下で、ずうつとこの白根しらねの奥に奈良田という

ところがある、そこに望月という郷土の家がある、これは徳川家以前の旧家で、天文永祿あたりから知られている家柄だ、その家でいま婚礼がある、この東の八幡村というところから嫁が行ったそのお届があつたから、拙者は何心なくその家のことを聞いてみるとな、望月というのは甲州金の金掘りをする総元締を代々預かつていて、表面に現われた財産も少ないものではないが、先祖以来、穴倉あなぐらに隠して置く金の塊かたまりは莫大ぼくだいなものだという噂うわさ」

神尾主膳は結局、その金の塊を突き留めてみたらば、思いのほかの掘出し物があるかも知れないということ、それはちようど今度の婚礼問題がよい機会であつて、役目を笠にいくらでもその高圧の手段はあるようなことを言います。

聞き終つた権六は、

「なるほど、そいつは近ごろ面白い見付物みつけものでございませう、まかり  
まちがつても嚇おどしで済む、うまくゆけば金脈もうに掘り当てる、転  
んでも大した怪我はなかりそうなのに、儲もうかれば大山だ。よろ  
しゅうございます、それだけの絵図面えずで、造作ぞうさくと建具けんぐの細かい  
ところは、しかるべき相棒あいぼうを見つけて俺共わつしどもの方で万事気をつけ  
ることに致しまして、早速、仕組みにかかるとに致しましよ  
う」

「うまくやつてくれ。それで権六、これが身共の徳川への奉公  
納めだ」

「奉公納めとおっしゃるのとは？」

「もう徳川も下火だ、我々も、いつまでこうしていられるかわ  
かったものじゃない、この狂言が済めば、それを持って侍をや  
める」

「なるほど」

「貴様にも一生食えるようにしてやった上、うまい酒も少しずつは飲めるようにしてやるつもりだ」

「それは何より有難うございます、そのつもりで端敵はがたぎを勤めて御覧に入れましょう。なあに、こういうことを時々おやりになるのがかえつて田舎者のためになるので、天下の通用物を、穴の中へ蔵かくしておくなんぞというのが心得違いでございますから、とつちめてやるのがお役目柄でございます。幸いにお支配はおいでなさいませんし、お組頭くみがしらのあなた様の御威光で、あいつらも慄ふるえ上つてしまうことでございますよう、よいところにお気がつかれました結構で」

「こういふことの相談は貴様に限る」

主従は、こんな秘々ひそひそばなし話をして酒を酌くみ交わしました。

奈良田の望月家では、花婿が花嫁の里帰りから帰るのを待ち兼ねているところへ、花嫁は帰らないで、不意に甲府勤番の侍が二人、数人の従者を引連れてやって来ました。

こは何事と驚く表から厳いかめしく踏み込んで、

「お調べの筋がある」

といって、隅から隅まで家の中を探し歩いたことで、家の者も近所の者もことごとく胆きもをつぶしてしまいました。

そうしてめばしい物にはことごとく封印をつけた上に、若主人を甲府まで同道するから、急いで仕度したくをしろということまで一  
同が青くなりました。こうして、委細のことは役所へ罷まかり出で

て申せとばかりで、遮しやにむに二無二この新婿様を駕籠に乗せて引張つて行つてしまいました。

あとの連中はなすところを知らないでいたが、同じ旧家の佐野だとか松本だとかいう老人が飛んで来て、望月の老主人を慰めながら相談の額ひたいを鳩あつめていると、

「甲府のお役人様は元湯へお泊りなされた」

村の人の報告であります。元湯とは机竜之助が泊つてるところ。

「それでは、もう一度、みんなしてお願いを致してみましよう、そうしてお話合いで済むようでしたら、若旦那をお願い下げにするように、骨を折ってみようではございませんかぬか」

お役人の一行が元湯へ泊つたと聞いて、佐野の老人と松本の老人とを先に立てて、お願い下げの運動をやってみようという

ことになり、お役人にお目にかかつて怖る怖る伺ってみると、さきの権幕けんまくとは少しく打つて変り、なんとなく手答えがあるようでしたから、

「さて、存外、話がわかりそうでございます……」

と言つて、その次の難問題に就いて老人たちと望月の主人と親戚とが評議をしました。

「百両」

まずその辺の相場かなと思つる者もありました。みすみす名の知れない金を百両出すのも業腹ごうはらだという面かおをするものもありました。百両で若主人の身体からだが釣替つりかえになれば安いものだといつて、望月の家では金には糸目をつけないという色を見せました。

再び出かけて行つた古老たち。

「ほんのお土産みやげの印しるし」

怖る怖る差出した土地の織物、それに添えた百両の金。それをお役人にと従者の手を経て献納して帰つてみると、程を経てその織物も金百両も突き戻されて来ました。

それから元湯の一室で、ひいひいと人の泣く声がする。荒々しく責める声が聞える。泣く方は人に聞かせまじと男泣き。責める方はわざと聞えよがしの荒い声。

土地でも宿でもそれ以来、火の消えたような静まり方で、ただそのひいひいと泣く男泣きの声と、荒つぽく責める申し上げてしまえの声とを聞いて心臓をわななかせるばかり。

それとはだいぶ間を隔てていたけれど、同じ屋根の下に泊り合せた机竜之助。まして眼のつぶれて感の鋭くなった耳にその声が入らないはずはありません。

お徳から、あらましの事情を聞いた竜之助が、

「ああ、それは偽物だ」

と言いました。

「あの、お役人は偽物でございますか」

お徳は呆れる。

「よくある手で、近頃はどこへ行っても流行る、徳川の御用金だとか、勤王の旗揚げの軍備金だとか言つて、ところの物持ちをゆするのだ、それがこの山奥までやつて来ようとは思わなかつた」

「では盗賊でござんすか」

「盗賊というわけでもない、なかには相当な志を持っているものが、心ならずもそんなことをして歩くのがある、結局は金で納まるのだ、白羽の矢を立てられたその望月とやらが気の毒」

「お金で済めば結構でござんすけれど、山方やまかたの人はそんなこと

に気がつかないで、お金などを出してはかえってお役人に失礼なんぞと遠慮をなさるかも知れませぬ」

「どのみち扱いが少し面倒だ。人はみんなで幾人ぐらい来ているな」

「お侍が二人に、お伴ともの衆が五六人、みんなで十人ばかり」

「それは少し大仕掛だ、ことによると望月の財産を振ってしまふようなことになるかも知れぬ」

「御災難でござんすねえ」

「災難だ、災難だ。それから、あの里帰りに行つたという嫁は帰つて来たのか」

「いいえ、まだお帰りござんせぬ」

「それも危ない。どのみち、この婚礼を付け込んで企たくんだ仕事だから、向うへも手が廻まわっている。結局ドチラも身代金みのしろぎん、下手へた

に出ると今いう通り両方の財産を振われてしまふ、財産だけならよいが、女のことから出来心、人の命にかかるようなことにならねばよいが」

「何とかして上げたいものでござんす」

「うっかり出ると巻添えを食う。いや、京都あたりではこの手で浪人者にひつかかつて、女房や娘を奪われたり家を潰つぶされたりした者が幾人もある、よくない時勢だ」

「あれ、あんなに苦しがつておいでなさる御様子、誰ぞ口を利きいておやりなさるお方はないものか」

「抛ほうつておけ、あれが手だから責め殺すようなことはない」

「それでも」

「また誰かやつて来たようだ、こりや今夜は夜通し眠れぬわい」

「もし、あなた様」

「何だ」

「あまりお気の毒でござんすから、ちよつと行つて口を利いておやりなされたら」

「わしに仲裁に出ろというのか」

「この辺の人は、まるきり山の人でござんすから、とても納まりはつきますまいと存じます、あなた様が、ちよつと口を利いてみておやりなされたら——」

「駄目、駄目、そんなことをするとかえつて藪蛇やぶへびじゃ、見込まれたが望月の因果よ」

「そんなことをおつしやつては……あんまり薄情のようでござんす、少しでもこの土地に来ているうちに出来たこと、届かなければそれまででござんすが、こうして土地の人が総出で心配をしております中で、わたくしどもも何とかして上げたいも

の、できないまでも……」

「待て、待て、この間、山崎が書いて行つてくれた手紙、甲府の勤番へ宛てての紹介状があつたはず、あれを出して見せてくれ」  
竜之助はお徳の話とは別に、思い出したように手紙のことを言うのと、お徳は机の抽斗ひきだしから取り出した一通。

「その表書うわがきの宛名になんと書いてあるか読んでみてもらいたい」  
竜之助は今までそれを打捨てておいたが、この場合に思い出すと、お徳は覚束おぼつかなげにそれを読んで、

「御組頭神尾主膳様と書いてござんす」

九

広いところを三間みまも打払つて、甲府勤番の役人が詰めていま

す。役人二人は床の間を背にして大火鉢の前に睥睨へいげいしている。左右に、用人、若党のようなのが居並んで、その前には望月の若主人が両手を後ろへ廻されて、その間を十手じってでコジられて苦しがつています。

「さあ申し上げてしまえ、お上かみのお調べによれば古金二千両、新金千両、そのほか太鼓判たいこばんの一分が俵に詰めて数知れず、たしかに其方そのほうの家屋敷の中に隠してあるに相違ない、ここで申し上げてしまえばお慈悲がかかつて不問に置かれる、強情張じやうじやうつて隠し立てを致すにおいては罪が一族に及ぶぞよ」

厳おごいそかに言い渡しているのは意外にも先日、甲府の旗亭で、神尾主膳と酒を飲んでいた折助おりすけの権六でありました。それがいつものまに出世したか、威儀厳然たる勤番格の武士の形になって、調べ吟味の指図さしずやく役に廻つていると、慄ふるえ上つている望月の若主

人は、

「どう致しまして、金銀を隠し置くなどとは以てのほか、先刻、家屋敷の隅々までも御搜索くだされた通り。また手前共の財産、すべて記録に差上げたものに寸分いつわりはございませぬ、お吹替ふきかえのありまするたびに、員数を改めて差出しまする古金新金、それを隠し置きまするような覚えは毛頭もうとうござりませぬ、御念の上ならば、もう一応、家屋敷をおさがし下されまするよう  
に」

　　畳へ額を擦すりつける。

「黙らっしゃい、其方の隠しておくところが家屋敷ときまつたものではなからう、世間の噂では持山の穴蔵あなぐらの中へ、先祖代々積み隠しておく金銀は莫大ばくだいとのこと、お上お調べの額たかはいま申す通り古金二千両、新金千両、別に一分の太鼓判たいこばん若干とのこと

なれば、内実ないじつは暫く不問に置かれる、但し、右の古金、新金の  
在ありか所はこの場で訊ただして帰らねば、身共役目が立ち申さぬ」

「これは、いよいよ以て御難題、さらさら左様な儀は……」

「これ、まだ強情を申しおるか、責めろ」

「申し上げろ」

十手を腕の間へ入れてコジる。

「ア痛、ア痛！」

「痛いか」

「御無理でございます」

「泣いてるな。これ貴様も、苗字帯刀許みょうじたいとうされの家に生れた男で

はないか、泣面なきづらかかずと潔いさぎよく申し上げてしまえ」

「知らぬことは申し上げられませぬ、存ぜぬことは……あ痛ッ」

「これこれ望月、僅か三千両の金のために貴様がこうして窮命きゆうめいを

受けるばかりではなく、あの八幡村から来た貴様の花嫁も追つてこんな目に会うのだぞよ」

「ええ、あの女房が？」

「知れたこと、亭主を責めていけなければ女房にかかる、それでわからなければ親へかかる。どうだ、これというもみんな其方が強情を張るからじゃ、僅か三千両の金、金が惜しいか女房が可愛いか」

「御無理でございます、御無理でございます」

「はははは、では女房が御城内へ引つ立てられ、親たちが縄付なわつきになつても、三千両の金は出せないと申すか」

「三千両などと申す大金が……」

「黙れ黙れ、先祖以来、公儀の眼を掠かすめて貯えた金銀が唸うなるほどあるくせに、三千両は九牛きゆうぎゆうの一毛いちもう。のう御同役、遠いところ

へ隠してあるならば、なにも古金の耳を揃えなくても、今時通いまどき用する吹替物ふきかえものでも苦しゅうはござらぬてな」

「いかさま、三千両の数さえ不足がなければ、板金はんぎんであろうと重金じゅうぎんであろうと、そこは我々が上役へよしなに取計らう」

同役二人が面を見合せるところへ、

「もしお役人様、ただいま、あなた様方にお目にかかりたいと、一人のお武家さむらいがこれへお見えになりました。お名前は水戸の山崎讓と申せばおわかりになると申しますのでございます」

宿の主人が怖る怖る、遠くの方から平身低頭しての取次であります。

折助には渡り者が多い。もとは相当の素性すじょうであつても、渡つて歩くうちに、すっかり折助根性おりすけこんじょうというものになつてしまいま

す。

折助の上には役割、やくわり小頭、こがしら部屋頭へやがしらというようなものがあつて、それは折助の出入りを司り、つかさど兼ねてその博奕ばくちのテラと折助の頭をは刎ねるが、これらは多少、親分肌の気合を持つている。渡り者の折助に至つて、はじめて折助根性がよく現われるのです。彼等の仕事は、カツパざる箆ざるを担ぐことと博奕をすることぐらいのもので、給金はたいてい二貫四百、一年中のお仕着せが紺木綿こんもめんの拾一枚あわせと紺単衣一枚こんひとえ。とてもそれではうまい酒が飲めないから博奕をする、博奕をするのは性質たちのよい方で、性質の悪いのになると人の秘密をさぐり、それを種にうまい汁を吸おうとする。

折助に向つて、これは内密ないしよだがねと言つて話をすれば、得たり賢しとそれを吹聴ふいちようする。また人の内密、ことに情事関係など

を探るにはぜひとも折助でなければならぬ働きがあるので、旗本の用人などが、これを利用してお妾めかけの身持ちなどを探らせる。お妾の方でも、それをまた逆に利用して、材料を提供する。そういう場合が折助の得意の場合で、時とするとそれを踏台に、折助には過ぎた出世をすることがあるので。

場合によつては折助が、土分の者の前へあぐらをかいてタンカを切るようなことがあります。また地道じみちの商人やその他の平民に向つて、折助は土分面をして威張り散らすことがあります。そうして折助は、大手を振つて手柄顔をすることがあります。

誰も折助を相手に喧嘩をしたくないから、それで避けている。そこに折助存在の理由があるので、うまく利用すれば、また相  
当の使い道もあるのです。うまく利用するというのは、意気で  
もなく然諾ぜんだくでもなく、ただこれぜに銭。

錢も現金でなければ決して彼等を動かすことはできません。大した金は要らない、一杯飲むだけの錢を現金で握らせさえすれば、その酒の醒めない間は、大抵の御用はする。その酒が醒めてしまえば、別に注ぎ足しをしない限り御用をつとめることはしないのです。

有為ゆういの士を心服させることのできないものが、この折助を使用する。歴然れつきとした旗本でありながら、神尾主膳は折助を使用して、人を陥おとしれなければならなくなったとは、浅ましいことです。甲府勤番に落ちたことは、どうも仕方がないけれど、折助を使用して人の内密を探り、それを種くさに小策せうさくを弄することは、よく見下げた心になったものです。

しかしながら、ここへ神尾主膳の仮面めんを被かぶつて来た折助の権六は大得意でありました。彼は勤番支配にでもなりすました心

で今、その威権のありたけを示しているところへ、不意に水戸の人、山崎讓というものが尋ねて来たと聞いて少しく狼狽ろうばいしました。

「ナニ、水戸の人で、山崎なにがし？」

眼をパチパチさせてみたが、本人の神尾主膳はその人を知っているかも知れないけれども、権六の神尾はそんな人を知らない。

「今は忙しいから、後刻面会を致す、いずれかへ無礼なきように御案内申しておけ」

「委細、承知致しました」

「水戸の山崎……お前は知っているか」

権六は、少しく不安心になつてきたものだから、後ろの席でこれも擬まがい勤番の木村に尋ねると、権六とは負けず劣らずの代物しろもの

で、岡引を勤めていた男。

「お前は知らねえのか、ついこの間お邸に見えた藤崎周水とい  
う易者がよ、あれが実は水戸の人で山崎讓という人だ」

「そうか、あの易者か。あれがまたなんだってこんな山へ来て、  
こちとらに会いてえというんだらう」

「あれは易者を看板にしているが本当は易者じゃねえんだ、も  
とは水戸の士よ。御三家の侍だから、こちとらとは格が違わあ。  
それで本名が山崎讓、うちの旦那の神尾様とは前からのお知己  
だ」

「それで、こつちが神尾主膳でここへ乗込んで来たことを聞いて、  
拵えものとは知らねえものだから、いい幸いで会いに来た  
のだらう、悪いところへ碌でもねえ奴が来やがった」

「けれどもなんとか始末をしなくちゃあならねえ、せつかくこ

ここまで漕ぎつけたところで、ここで化ぼけの皮かわが剥げたんじゃあ、宝の山へ入って馬の皮を持たせられるようなものだ。なんと同役、とてもことにその山崎という奴を、うまく賺すかして押片付けてしまおうじゃねえか」

「そいつは駄目だ」

同役の木村は、せつかく太く結い上げて来た鬚まげを惜気おしげもなく左右に振り立てる。

「駄目だとは？」

「とてもとても。その山崎という奴は、こちとらが三人や四人、東になってかかったからとて齒も立つものではない」

「そんなに腕うでの利きいた奴か」

「腕うでが利きいたにもなんにも、香取流かとりりゅうの棒を使わしたら、天狗のよううでな腕うで利きだ」

「棒を使うのかい」

「先日も、神尾様のところへ二三日逗留とまりゆしている間、殿様が冗談じょうだんはんぶん半分に、山崎、この盤へひとつ印をつけてみるとおっしゃると、よし来たと言つて笑いながら、仲間の持つちゆうげんていた六尺棒を借りて、一振り振つて碁盤へ当てると、どうだろう、その碁盤の上が棒形に筋を引いて凹くぼんでしまった。恐ろしい腕前だ、あの棒が一当り当つたら、こちとらのなまくらはボロリと折れて、腕節うでつぶしでも首の骨でも一堪ひとたまりもあるもんじゃねえ」

「いやな奴だな」

「全くいやな奴だ」

「そんないやな奴がこの時勢に易者の真似なんぞをして、この山の中までブラブラやつて来る気が知れねえ」

「山の中へ来るのは、やつぱり仕事があつて来るんだ、あいつ

は新徴組しんちようぐみだよ」

「新徴組か」

「今は上方かみがたで新撰組となつて、近藤勇が大將だ」

「新徴組じゃあ、こちとらの齒には合わねえ」

「弱つたな」

「勤番の役人様が、今度はあべこべに、油を絞られて突放つっぱなされるところという図になつてはやりきれねえ」

「いやな奴が来やがつた」

「全くいやな奴だ」

二人は膝を組み合せて、折助言葉に砕いて話し合つているところへ、

「御免下さいまし、あの、山崎様が、御用済み次第お目にかかりたいとお使でございました、もしお役人様のお席にお差支え

がござりますれば、望月様のお邸がお広うございますから、失礼ながらあちらへお運び下さるよう申し上げてみるとの仰せでござりまする」

「やかましい、用が済んだらこつちから出向いて行くと、そう申せ」

「ハッ」

「弱つたな」

「全く弱つた、その山崎という奴がここへ来て、大勢のいる前で面の皮を剥むかれた日には恥づらの上塗うわぬりだ」

「だから、こつちから行くと行ってやったのだ」

「向うへ行つて、向うで面の皮を剥かれたって好い心持はしねえ」

「どつちへ向いても面の皮を剥かれるのは楽なものではあるま

い、なんとかいいい工夫はねえかなあ」

「敵を見掛けて夜逃げをするわけにもゆくめえから、どうだ一番、乗るか外そるか二人でおしかけて、その山崎にぶつかつてみよう」

「そうさな」

「もとよりこつちだつて、殿様御承知の上で仕組んだ狂言だ、バレかかったら神尾主膳実はその代理ということ、うまくお茶を濁してしまおうじゃねえか」

「まあ、そういうことでやってみよう、まかり間違つたら拝み倒しよ。なに、山崎だつてずいぶん殿様のお世話にはなつてゐるんだから、まるつきり話のわからねえこともあるまいよ」

「今夜は、ゆつくり休んではかりごとを考えて、明朝早く望月のところへ出かけるとしよう」

それで二人は寝ようと思つてゐると、

「申し上げます、山崎様がただいまこれへお越しになりました」

「ナニ、山崎が来た？」

「ハイ、お役人様にお見せ申すものがあると申しまして、おひとりですれへおいでになりました」

「明朝こちらが参ると申したではないか」

「でも、山崎様が急の御用とおっしゃいました」

「山崎の急用は私のことだ、こちらの用は公儀の御用だぞ」

「恐れ入ります」

「早く追いつ返せ」

「あれ、もう廊下をあの通り、ひとりで歩いておいでになります」

「ナニ、ひとりで歩いて来る？ それは困つた、ここへ来られ

ては困る、ここへ来てはいけない」

「それでも、あの通り槍をお持ちになつて、無理にお通りでござりまする」

「ナニ、槍を持つて来た？」

二人の擬い勤番まが きんぼんは、障子をあけて外を見ると、長い廊下の向うから、人が一人、闇の中を静かに歩いて来ると、そのあとから追いかけるように一人の女が雪洞ぼんぼりを差し出しています。

「神尾殿、神尾主膳殿」

廊下を歩いて来る人は、二間も三間も隔たつた向うから神尾の名を呼ぶ。そのくせ、廊下を歩く足どりはゆつくりしたものです。

「チエツ、来やがつたな。それにしても、あの声は……」

二人は廊下の闇を微かな雪洞ぼんぼりの光をたよりに山崎の様子をう

かがうと、どうやら人が違うようです。

碁盤へ印をつけた山崎はもつと太った男であつた。甲府へ来た時の山崎はあんなさむらいふうな土風ではなく、易者のようなかつこう恰好をしていたし、その山崎の声は、もつと太くて力のある声。いま呼びかけた声は低くて沈んで病人のような声です。

「あれが山崎か」

「左様でございます」

「何だ、山崎は病人か」

「お目が御不自由で、それゆえ失礼ながらこのままとおつしやつて、槍を杖に突いて、おいででござりまする」

「そりや訝おかしいぞ」

二人は面を見合せていた時に、廊下を渡つて来た人、黒の紋かお付を着流して腰に両刀、それで九尺柄の槍の石突いしづきで軽く廊下の

板を突き鳴らしながら、

「珍しいところで神尾主膳殿、拙者は山崎でござる、山崎讓、山崎讓」

槍を杖ついて来たのは机竜之助で、

「神尾殿、神尾主膳殿、珍しいところでお目にかかる」

早やその部屋近くまで来たから擬まがいの神尾主膳は、

「山崎、あの、御身が山崎讓殿に相違ないのか」

「いかにも山崎讓、先日は失礼致した、御免あれよ」

竜之助はこう言つて、槍を携えたまままで彼等の部屋の中へ入つてしまいました。

「いつぞや御所望ごしよもうになつた道具、幸い、この山の中でぶらぶら遊んでいる間に、この通り手に入れた。この上の望月という家にあつた槍、拙者はこの通り眼が見えないが、天正以前の作と

覚えて申し分がない、柄は竹を合せて作ったもの、賤ヶ岳七本槍の時、あの連中が使った槍に竹の柄があつた、竹を削つて菊の花形に組合せて漆を塗る、見たところでは櫛の柄と少しも変らぬのだが、間違つても折れることはない、結構なものを手に入れた。近いうちに甲府へ行つて献上しようと思つていたところへ、貴殿がここへおいであつたというは幸い、それでこの通りに押して参上」

ぬきみ  
抜身の槍を抱えて竜之助は程よいところへ坐り、穂先をズツと燈火あかりの方へ向けたから、擬いの勤番連は煙けむに捲かれて、

「なるほど、うむ、その槍が……」

「こういう品は今時いまじゆ、この山国でもなければ滅多には出て来ないわい、いざ神尾殿、よく穂先こみから込の具合まで、鑑定めぎきして御覧あれ」

竜之助はその槍の穂先を、擬いの神尾主膳の方へ突きつける。

「なるほど、これは見事な槍、近頃の掘出し物、なるほど」

「御所望とあらば進上致す」

「いかにも珍らしい槍、頂戴して甲府へのみやげにしたい」

「それはお安いこと、進上致そう。その前に一応の鑑定めきぎが所望」

「いや、我々には目が届かぬ、貴殿の御鑑定では？」

「目のあいた神尾殿に鑑定の届かぬものを、目のない拙者になんで鑑定ができよう」

「しからばこのまま頂戴致す、誰かこの槍を頂戴して床の間へ飾れ」

擬いまがの神尾主膳に附添いの者共はみな集まって来たし、この家の主人や婢僕ひぼくまでもみな廊下のところ、そつと様子を見に来ている。その向うには、望月家を初め、土地の古老たちまで

面を並べて怖る怖るこちらを見えています。<sup>かお</sup>

「いや、神尾殿、槍は貴殿に進上致すが、貴殿の方から拙者も頂戴致したいものがある、なんとお引替え下さるまいか」

「この槍と引替えに何を御所望かな」

「拙者には別に望みはないが、もとこの槍は望月家秘蔵の槍、よつて望月家へ相当の謝礼をしてもらいたい」

「望月家へ謝礼とは？」

「もとより金銭に望みはない、先刻お引連れになつた望月家の若主人、これは望月家にとつて槍よりも大切な品、それとこの槍とお引替えが願いたい、その仲人は山崎讓<sup>ちゆうにん</sup>」

「ナニ」

「この槍と望月の若主人とを引替えてもらいたい」

「黙らっしゃい」

「黙れとは？」

「言わせておけば方図ほうずもない、いつたい貴様は何者だ、山崎讓の名を騙かたつて拙者共の部屋へ案内もなく推参する不届者ふとじきもの、拙者共の知っている山崎は貴様のような盲目めくらではない、病人ではない、このうえ無礼を申すと手は見せぬぞ」

擬いの神尾主膳は堪たまり兼ねて刀を押取おつとると、附添いの者合せて十余人がみな同じようにして竜之助を取捲く。

その時の竜之助の冷笑は、やはりこんなやつらを相手に、我ながら大人げないという冷笑で、彼等あざけを嘲るのではない、自分を嘲るような冷笑でありました。

「申すまでもない山崎讓は偽名、拙者には別に本名がある。しかし山崎は拙者の友人、その名前を騙かたつても別に障さわりもあるまいから、ちよつと融通してみた」

「無礼者め！ 本名を名乗つて、早く謝罪あやまつて引込め、さもない時は手討ちにする」

「本名はそちらから名乗つてみるがよい、今は知らず、神尾主膳はもと三千石の旗本、もう少し睨にらみの利いた男であつたはず」  
こう言いながら竜之助は、片手で持つていた槍を、両手で持つて折敷おりしきのような形に身体からだを立て直すと、その槍の穂先が擬いの神尾主膳の咽喉元へピタリ。

「これ、何をする」

擬いの神尾は驚き慌あわてる。周囲の者共はどよみ渡る。

「本物の山崎は棒をよく使つたが、拙者さやばしはあり合せの槍。おのおの騒めしぐな、騒いで刀が鞘走さやばしるようなことがあると、拙者の眼は盲めしいたれど、この槍の先には眼がある」

刀の柄つかへ手をかけて立ち上つた擬いまがの神尾主膳は、竜之助の

槍の穂先で咽喉のどを押えられて動きが取れなくなつてしまつた。動けばブツリと咽喉へ入る、反身そりみになつて外はずそうとすれば、穂先はひたひたとつけ入る。赤くなり蒼くなつて、とうとう床柱へピタリと押しつけられてしまいました。

「無礼者、無礼者」

床柱へ押しつけられて苦しみもがく擬いの神尾主膳。

あたりに見ていた者共も、この奇怪なる盲目の武士の振舞に怖れをなして手出しをすることができない、手出しをすれば擬いの神尾が殺やられる。山崎の名を騙かたつて来たように、ワザと盲目の真似をして来た者、手剛てごわい敵、手が出せぬ。それで、一同も眼を白黒としてしていると、蒼くなり赤くなつてゐる擬いの神尾主膳、

「槍を引け！ 槍を引いてくれ給え」

苦しい声。

「槍はいつでも進上致す、その代り引替えの品」

「引替えの品、承知」

「承知致したか、望月の若主人を戻すか、戻してこの槍と引替えに帰らつしやるか」

「いかにも、槍と引替えに」

「よし、しからは誰か、望月の若主人をこれへ。遠慮は要らぬ、縄目を解いてやってくれ」

次の間から連れ出された望月の若主人、

「どうも有難うござりまする、なんともお礼の申し上げようがござりませぬ」

竜之助の前にひざまずく。

「早く繩を解いて上げろ」

「へえ、もう繩を解いていただきました」

「では、一刻も早く、おうちへお帰りなされ。誰かこのお方を  
つれてこの場をお引取りなさるがよい」

「有難うござりまする」

望月一家の人たちは、若主人を擁ようして大急ぎでこの場を出て  
行つてしまいました。この時もまだ竜之助は、擬いの神尾主  
膳の咽喉元へ突きつけた槍をはなそうともしないで、

「さて、引替えの品は確かに頂戴した、槍はこのまま進上致す、  
受取らつしやれ」

「呀あつ！」

擬いの神尾主膳は絶叫して、両手を高く挙げて虚空こくうを掴つかむ。  
「呀！」

一座の者が敵となく味方となく仰天ぎょうてんしたのは、槍を手元へ引かないで、机竜之助が、擬いの神尾主膳の咽喉元を一突きに突き刺して、その穂先は床柱へ深く、人間もろともに縫い付けてしまったからです。縫いつけられて一旦、虚空を掴んで苦しがつた擬いの神尾主膳、創口きずぐちから矢のように迸ほとばしる血まみれの槍の柄を両手に掴んで、苦しまぎれに抜こうとしたが抜くことができません。

大菩薩峠 白根山の巻

底本：「大菩薩峠 2」ちくま文庫、筑摩書房  
1995（平成 7）年 12 月 4 日第 1 刷発行  
1996（平成 8）年 2 月 15 日第 4 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房  
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 6 月 2 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。